

# 干潟の四季

森田三郎

# 谷津干潟・元旦クリーン作戦

日時 一月一日(火) 午後一時～二時

場所

あずま屋「いそしぎ」の前

黄色いハンカチの旗が目印

文責  
森田三郎

用意するもの

ゴム手袋又は軍手

今までの、長いクリーン作戦の中で、この一年程楽しいことはなかった。

干潟にあっては、その周辺において、その効果が、更りがはつきりと表われ、動かし難いものになってくる。とくに、運動・社会的・地域的なものに心強さを感じている。

私達の合言葉は、「干潟に行ったら、まず、とりあえずゴミを拾おう」という、すなわちこれである。これが原点であり、基本であり、すべての初まりである。

谷津干潟クリーン作戦は、二つの見方ができる。

一つは、ゴミを拾えばその分だけきれいになり、何よりと、カニヤゴカイ、ヨシなどの水辺の草といった干潟の生命活動を促進されたこと。これは直接的なことで、物理的・環境的なことと言えよう。

二つ目は、社会的・心理的なことで

ある。今までさんざんゴミが捨てられ、どうしようもなく汚くなっていく所でも、誰かが、いつと、断えぬなく拾い続けたという行為。それか、徐々に、ゆっくりと、染って浸み込むが如くに、ゴミを捨てるといふ行動と心理にブレーキをかけたのである。これは肉体的な働きと言えよう。

しかし、これらは、当初からそう考えていたわけではない。今なら、否、今だからという考えから本来的である。その時は、そういう余裕と、時間もなく、肉力的にも経済的にもなかった。希望と信念と賭けの、入り混ったもの。

私の小さと、あの「小かんぞ」の負えた重荷を、少しでも軽くしてやりたかった。その痛みを、十字架を、私自身を抱えようとしたのである。「小かんぞ」の呼び声。それは私に対する訴えであり、向いかけであり、提示だったのである。裁き台に乗せらるべきは、谷津干潟ではなく、私という人肉だった。持ち行くものは唯一つ、他のすべてを置いて、私自身のみ。それ以上で、それ以下でなく……。

町の声  
村の声

我になわん

負いし来たりし「ふかんど」の

痛みと重荷を想いなば

彼我の境もなかるべし

一つ、また一つ、ゴミを拾っていく。

そうすれば、その分だけ、谷津干潟の、

あの「ふかんど」の荷が軽くなる。そう

思い、信じている。だから、私はやって

いく。できる時に、できる所で、絶え間なく。倦まずたゆまず、どこまでも、そしてまた、どこまでも。

私は新聞販売店員だ。自然愛好家や野鳥観察者ではない。その当時は見はるかす限りの干潟だった船橋の海辺に育った。貧しい家の子どもだった。自然保護のことはなにも知らない。

干潟は埋め立てられて、住宅地や工業用地になった。わずかにのこされた谷津干潟（二〇畝）の数本の杭が私の記憶を呼び起こした。そこが、子どもどころ、カニや魚と遊んだ「ふかんど（深いところ）」だった。私は干潟のゴミを拾い始

めた。

わが身もて、少しでも、ほんの少しでもいい、干潟の負える重荷をとりのぞいてやりたい。山のごとの大をなす圧倒されんばかりのゴミも、見れば、そのすべては皆一つずつではないか。だから、私は一つ一つ拾っていく。ただもう、それだけ。何で気落ちしたり嘆いたり、思い煩い、論ずるのみにて、コノ時を無駄にしてよいものか。それらが、干潟をきれいにせんとしむことより大切なのか。なんで、できないものを数えたてて、それにひたるのか。

軽しめん

干潟の重荷をそのたびに

一つ一つと、一つずつ

つまづき転びの我なれど

干潟の呼び声“聞きたれば

私は選んだのだ。九十九の、もっともな、立派な、できないという理由よりも、たった一つの「やればできる」というものを。たとえそれが貧弱な、みすぼらしい身ナリをしていようとも。とり残され、見向きもされず、みじめなものであらうとも。

谷津干潟クリーン作戦とは陳腐な名だ。バカ、気がいい、ドジン、売名行為、よそ者、汚ネエ、と言われた。精神的税金と思う。でも一人、また一人、お茶を、ロープやマキ割りを、ゴミ袋を車を水を弁当をカンパしてくれる人が出はじめた。そして、近所の主婦の人たちがゴミ拾いに参加し始めた。「私」から「われわれ」になった。

いま、女の細腕を中心に、千葉県企業庁、建設会社、大蔵省（干潟の所有者）も協力している。しかし、隣接する谷津遊園の経営者京成電鉄は、海の恩恵を受けながらゴミの不法投棄をし、駐車場の

ために干潟の一部の埋め立て工事着工を強行した。

私ゝわれわれは、手を差し出し踏み込んだのだ。その小さな、やせこけた、可能性に。トンネルの中から遠くの点のような光の出口を見る。そんな心境だ。たとえ出口がなくなるともよい。谷津干潟の重荷を軽くしてやろうと、努力する能力を与えてくれた父や母に感謝する。そして幼き日、拾い干潟や野原につれていくてくれたガキ大将のマーチャンに感謝する。

明暗、上下左右にゆれ動く、変転きわまりなきわが心。なれども「干潟の重荷

「痛みを軽しめん」という想いの前に、すべては背後に退く。いま、ここから、この身のままで始めるのだ、といつも思っていた。そうして、精神的戦線を何度も建て直してきた。勇気をもって正面へ足を踏み出し、干潟の呼び声のするほう、その彼方へ眼を転ずればよい。太陽に向かうのだ。

みずからのほか、何か、これを妨げるものがあるだろうか。思うに、問われているのは干潟の価値ではない。われわれなのだ。干潟にとってどんな人間だったか。干潟のために何をしてやれたか。その人自信が「答え」なのだ。海との水路

の拡幅で、カニや魚や水鳥が増えてきた。ゴミを拾いながら彼らの問いに答える。埋め立て地の地下に埋もれし、幾億万の干潟の仲間が、心の戸を叩く。「どんな人間として、われらと対すや？」と。

(もりた さぶろう 新聞販売店員)  
『朝日ジャーナル』1980年10月10日号  
「列島診断」より転載

## ヨシゴイの営巣を確認

谷津干潟で、初めてヨシゴイが卵を産みました。卵は、ウズラより幾分大きく、うす緑色がかかっています。数は八個。

場所は、こともあろうに、谷津三丁目目の人家のすぐ近く、護岸から十五メートルぐらいのところ。散歩の人がよく通るし、ゲートボール場があります。話し声もよく聞こえるし、ボールを打つ音も「カーン、コッーン」と響きわたっています。

「谷津干潟クリーン作戦モデル地区」と書かれた、流木なる丸太の標識が立っていて、この標識の上では、盛んにヨシキリが鳴いています。ヨシキリもまた、近くで三つの巣をつくっているのです。

ヨシゴイの営巣は、谷津干潟では初めて、ヨシゴイの姿を見たのも去年が初



めてでした。たまたまクリーン作戦を展開しているとき、主婦の人が見つけたもので、しかも若鳥でした。

その後、護岸から注意していたら、ヨシの茂みから茂みへと、転々と飛んでいる姿を見るようになりました。その姿が最もよく見られたのが、実はこのモデル地区のヨシ野だったのです。ひよつとしたら今年は巣をつくるかもしれないと、日頃から期待をもつて観察していました。

営巣しているヨシ野は手づくりのもので、かつてここは、護岸の高さまでゴミの山があったところ。それを三年がかりで徹底的にきれいにし、水辺の草やヨシを生えさせてきました。そして、体操ガニの大群が棲み、その砂団子でふかふかしている干潟も、スコップで砂をすくい、一輪車で運んできてつくった手づくりの干潟です。そこで今、ヨシゴイが毎日卵を温めているのです。



## 谷津干潟市民クリーン作戦

干潟は今、渡り鳥の交代劇が演じられています。夏の鳥は南へと旅立ち始め、北のシベリアやカナダからは秋の鳥が、日を追って次々と飛来し、その数を増しています。

ベンチのある草原では、夜ともなるといろんなコオロギたちの大合唱です。さて、昨今、「谷津干潟」の名が周辺地域に知られたせいでしょうか、ここに新しいクリーン作戦が誕生したことをお知らせ致します。

谷津干潟のファン、あるいは谷津干潟が好きなる人を中心とするものです。話し合いの結果、私たちはそれを「谷津干潟市民クリーン作戦」と名付けました。現在、毎月二回の恒例のクリーン作戦が行われておりますが、これよりもはるかにソフトタッチなもの……。気軽な心、散歩がてらにやりたいという声が、

以前より少なからずありました。「谷津干潟市民クリーン作戦」はそういう人たちによってつくられ、また、対象としています。

参加方法や時間は自由。観察や話し合いもその人の都合次第です。ほんのわずか、一つかみのゴミでも拾ってくだされば、それで大いに結構です。

顧みれば、谷津干潟クリーン作戦は九年前、ただ一人の、素手をもってして、その呱呱の声を挙げました。不撓不屈にして継続せしその心と実践は、いまや多くの人々によって支えられ、大なるうねりとなって、常に保存運動のバックボーンとなってきました。

かつての、山の如きゴミは、現在、カニやゴカイ、渡り鳥や水辺の草の安住の地となっています。そして、ここに至ってついに、二十余年前に消滅した“海草”を、藻の発生を見ることに相なりました。

「海の子宝」ともいふべき藻の発生こそ、名実ともに確固たる、私たち、谷津干潟クリーン作戦の打ち立てた金字塔でありましょう。

ヨシ野なれ

草の匂いの 夏の目々

今はすすき、波うつ穂

ベンチの草むらや谷津干潟自然緑地には、今、いっせいにヨシやスキの穂が咲き誇っています。晴れ渡って澄んだ秋の空、吹く風はひととき高く、シギやチドリを運んできます。

数万のメダカが泳ぐメダカの池も、着手以来早くも三年、ようやく水も安定してきました。近くのお店からパンのミミをもらってきては、毎日のように投げ与えておりますと、水面に散らばったパンの一つひとつに、たくさんメダカたちが食べに集まるのが見えます。

六月の梅雨の頃、子供が放った二十数匹の金魚も、今はとっても大きくなり、あちこちで赤い背が見え隠れしているかと思えば、ザリガニが巣穴を掘り、カニやヤゴもいるといった、ちよつと面白い秋の「メダカの学校」です。

(一九八三・一〇 第八七回)

アラジンの

ランプの如きか　パンのミミ

とくろと手たてを　変えぬれば

干潟の陰模様　とりどりに

見せて楽しくや　今日もまた

春一番の待たれる頃となり、寒さも大分薄らいでまいりました。同じ寒さでも、真冬の、あの突き刺すような感じではなくなって、柔かみを帯びています。天気の良い、温い日に干潟へ行くと、ほんの少し、土や水の匂い、そして枯れ草の匂いがあるようになりました。クリーン作戦の、最もつらい、厳しい季節が終わろうとしているのです。

干潟での清掃は毎週行われておりますが、これからは、手がかじかんで固くなってしまったり、長靴の中の足の裏が、あまりの冷たさに痛くなり、しょっちゅうピョコピョコということもなくなるでしょう。

ユリカモメの餌づけもその後ずっと順調に進んでおり、春の気配を感じさせる風に乗って、桜の花が舞う如く、群がり集まってきます。

カモは初め二、三羽しか来ませんでした。少しずつ仲間を誘うようにして増え始め、今では七十〜八十羽の群れがぞろぞろと目の前まで近づいてきて、パンのミミを食べています。

春夏秋冬を通じ、いろいろな時と場面を経てきた思い出多き谷津干潟クリーン作戦。あるときは柔らかくゆるやかに、そしてまたあるときは、強力にして岩の如く、確固たる行動と信念で進んでまいりました。

万葉ばんたの桜の花が開かんとするこの四月、私たちの谷津干潟クリーン作戦はいよいよ一〇〇回目を迎えようとしています。

雪をわけ

氷を割りての　ごみ拾い

ひとつひとつに　心こめ

凍てつく干潟を　踏み歩く

やがて来る春　楽しんで

—— 願いを込めて掲げました

幸福の黄色いハンカチの旗　——

「谷津干潟に幸福を呼ぼう！」　そんな思いで、この旗はつくられました。  
旗をつくってくれたのは、秋津団地にお住まいの山中トキさんというご婦人



す。老人クラブ「楠の木会」の副会長をしておいでです。

山中さんはこのほかに、コバルトブルーの暖簾もつくってくださいました。お針事がとっても好きだと言ひ、いっぱいいろんな布切れを持ってもらえます。

昨年の夏、干潟の自然緑地の草むらで、カマを貸してほしいと言われたので、「どうするのですか？」と聞きました。すると山中さんは、「ここに生えている草でわらじをつくってみようかと思ひまして」と、そんなふうに言っておられました。

谷津干潟に幸福を呼ぶ「黄色いハンカチの旗」は二本あります。長さ二十メートルのロープに、大小三十枚もの黄色いハンカチをずらりと並べて、きちつと縫い付けてあるものです。

干潟から、太くて長い流木を引っ張り上げ、てっぺんに滑車をつけて、旗を掲げるポールも仕立てました。

昨年の春以来、毎日曜日や休日には必ず、カラカラと回る滑車の音を聞きな

がら、その幸福の黄色いハンカチの旗を干潟の空に掲げ続けてきました。

「フロートネの小屋」の砂道を、たくさんの人が通ります。そして、みんなこの旗の下をくぐって行くのです。

山中さん、どうもありがとうございます。あなたがつくってくれた、この黄色いハンカチの旗は、『ふかんど太郎 谷津干潟』に幸福を読んでくれましたよ。これからおからだを大切になさってください。

—— 今日 旗 を 掲 げ っ つ ——

(一九八四・二 第九五回)



黄色いハンカチ

澄むたびに

寒そかそぬる　月夜かな

この身をば

干潟になぞらへ　十年ととせなる

負へる重荷を　軽くめん

冷たい寒気で手がかじかむ。ハーツと息をかけては、こす合わせながら手を温める。

透き通るように晴れ渡った真冬の干潟の水面。ツピーツ！とばかりにシギの

さえずりが、凜乎として辺り一面に響きわたる。

そんなとき、「オオーオーイッ、オオーオーイッ！」と叫び、呼びかけるのだ。そして同時に、千切ったパンのミミを、掌いっぱいつかんでは、パーッと空に投げ上げる。パラパラと水面に散らばって落ちてゆく。

すると、はるか向こうから、これを目敏く見つけた一羽のユリカモメがぐんぐんこちらに向かつて飛んで来た。スーッと、何の音もなく、海面に浮かんだパンのミミの上を、偵察すること一、二回。二、三度、試すが如く水面すれすれにミミをついばむ格好をした。そして、ピシャッ！と水音を立ててパンのミミをクチバシですくい取った。するとどうだろう、遠く群れなす白い塊がゴソゴと崩れ始め、次から次へと、また、あちこちから、続々と集まってくるのだ。バケツ一杯分のパンのミミが、ギャーギャーという叫び声と、バシャバシャという水音の中で、アツという間になくなってしまった。

位を聞く

青の洞門 西の方

ふかんど太郎 谷津千瀉

クリーン作戦 我らあり

つい先日、菊地 寛の『恩讐の彼方に』を読んだ。例の「青の洞門」の物語を知っておこうと思つてである。言葉は聞いていたが、実際に読むのは初めてであった。

われわれのクリーン作戦を、この「青の洞門」に例える人が何人かいたので、読む気持ちになつたのである。

生々しい実感と共に一気に読んだ。そして、再び読みなおし、さらにまた一

度読んだ。

読後感、大いに力を強くした。読んでよかつたと思った。時とところは違えども、共感と想像をかき立てられた。今度、機会があつたらその「青の洞門」とやらを見にいきたいものだ。

谷津干潟クリーン作戦——実によく続くと思う。本当に干潟の清掃、つくづく飽きないものと、自ら感心している。それはきつと、干潟とじかに触れ、交わるからである。

これから春の渡り鳥の数が日毎に増えてゆく。カニやゴカイ、水辺の草もその生命力が疼きたす季節だ。陽気がよくなるとともに、干潟の清掃もずっとやりやすくなり、身も心も軽くなる。

「青の洞門」の物語、何か長年胸につかえていたものが溶けて消えてしまう感じを与えてくれた。いい時期に読んだと思う。



雨上がり

土の匂いに 春おもう

満月の

明かりで メダカの池を掘る

「メダカの池」が干上がっている。カラカラに乾いて、地割れがしている。昨年の秋頃から雨らしい雨もなく、異常に乾燥しているためである。

昨年の今頃は水がいっぱいあった。そして夜になると、月の光が水面にキラキラする中、コミミズクが飛んで来て、水にその姿を映しながらネズミを捕まえていた。

メダカの池に水がないのは淋しいが、逆にこれは、メダカの池をつくるのに絶好のチャンスである。つくりだしてから三年、いつもいちばん雨が少ない冬期に重点を置いて、あれこれと考えながら、試行錯誤で作業を繰り返している。

メダカの池には子供たちも来るので、あまり深くすることはできない。また、ある程度以上に水の量が増えないよう、水を逃がすためのパイパスもつくってある。危険な状態になるなら、池の水が涸れても止むを得ない、というのが大前提である。

試験的につくられたこの「メダカの池」という淡水池——埋め立てという特殊なところでは、まず水を溜めることそのものがむずかしかった。雨水だけしかない。たとえ、将来、メダカの池のようなものを本格的につくるにしても、池の中にピニールとかコンクリートなどを使ってはならないと考えている。

ある人の話によると、掘っただけの池を「素掘り」というそうだ。

去年の夏のメダカの大群や七十匹余りの金魚たちは、毎日人がすくいに来た

り、これまた昼夜分かつた食べに来る鳥たちのために、水がなくなる前に一匹もいなくなつてしまった。

三年越しのメダカの池には今まで、カルガモ、コガモ、ヒバリ、コチドリ、シロチドリ、セキレイ、コミミズク、イソシギ、コサギ、カモメ、ハト、スズメ、ツグミ、カラスなどが来ていたことが確認されている。

やがて来る春を待ちつつ、砂と霜が月の光でキラキラとまぶしいくらいの夜、しんしんと冷える自然緑地で、ああじゃないか、こうじゃないかと思いを巡らしつつ作業をしている。

(一九八四・二 第九回市民)



コミズク

かけろうと

木枯らし重ねて 陽はのびつ

三寒四温の 干潟なれ

来月で「谷津干潟クリーン作戦」はいよいよ第一〇〇回目を迎える。

ひとときわ寒さの厳しかった今年の冬——。冷たい北風の吹きすさぶ干潟であれば、そこで作業をしたり、衣服を着替えるということは、なかなか勇気のいるものである。それだけに、干潟でのあらゆる季節の変化と全身でもって付き合い、その中にさらされながら活動し続けているわれわれとしては、若草の春の訪れを人一倍望むのである。

日曜・休日ごとに集い来る会員たちの表情や言動にも、快活と或る喜ばしさ

が見られるこの季節――。

干潟での清掃に取り組んで以来迎える十一回目の春だ。幼き日々を育んでくれた、あの「ふかんど」を救わんと、今なる谷津干潟保護運動の「からし種」「種火」たらんと、小さな、か細き呱呱の声を挙げた「谷津干潟クリーン作戦」。そのバックボーン成れかしと、身を挺しきたと信じ、一〇〇回を契機に決意とその志操を新たに、なお一層奮励努力し、勇猛邁進するものである。

(一九八四・三 第九八回)

ゴミを取りや

砂は息して　うれいそう

お日様カンカン　そよぐ風

カニがわんそか　湧いてきて

みんなで　体操　してやんす

春だ。干潟に春が来た。ゴールデンウィークの締めくくりは、谷津干潟市民ク  
リーン作戦といきたいものである。先の句、谷津干潟クリーン作戦の“極致”  
である。

干潟が貴重なのは、鳥やバード・ウォッチャーがいつばい来るからではない。  
干潟が、干潟だからである。もし、そうでなかったら、干潟に対して“失礼”



である。

四月に入ってから、野外活動、特にわれわれのクリーン作戦は、本格的に、着実に“反撃”に出始めた。何しろこの冬は、例年になく厳しく、長かったので、とにかく寒さに押され気味だったからである。

われわれの心と身体は、陽気がよくなってきた今日この頃、旺然と、そして鬱勃と当時がこみ上げてきているのだ。

干潟では、カニが一面にその数を増し、体操カニが体操をするようになった。魚の群も、ところどころに大小の黒いかたまりや、帯状に連なって泳ぎまわっている。水辺の草も芽を出して、ぐんぐん伸びてきた。

今が渡り鳥のピーク。干潟とそこに棲む生き物のため、一人でも多くの人々が干潟に来て、利用しやすいようにしよう。バード・ウォッチャーも控えている。

さあ！ 干潟の“御用聞き”にして“下足番”たるわれわれは、大いに頑張りに、かつ働かねばならないのだ。

(一九八四・三 第一〇回市民)

留またり

事物の流れの 直中で

呪文の如くに 四六時中

谷津の干潟よ 甦れ

潜在意識の 彼方まで

今年はこのほか春の訪れが遅く、花だよりもまだまばらなこの頃ですが、例年ならば桜の花盛りのこの季節、「谷津干潟クリーン作戦」は一〇〇回を迎えることになりました。これもひとえに皆様方のご協力の賜物と、感謝致しております。

谷津干潟——。それは、たったひと言「谷津干潟よ 甦れ」ということに尽きます。この言葉、この想い、そして信念を、どんなときにも、どんなところでも唱え、心に描き、しっかりと把持してきました。

「谷津干潟よ 甦れ、谷津干潟よ 甦れ……」と呟き、想い、心で、体でも唱えてきました。それは「律動」となって私たちを、実践行動を、運動を支えてきました。

「谷津干潟よ 甦れ」という「律動」——。私たちは体験しました。身を以て知り、理解、会得しました。すなわち、それは「成るもの」であることを。動くものではなく、「動かすもの」であることを。それは、現れるものではなく、「現すもの」であることを。それは、つくられたものではなく、「つくるもの」であることを——。

担うべし

過ぎ〜 来た〜 ふかんの

痛みと重荷を 思いなげ

彼我の境を 越えゆかん

今から十年前、谷津干潟クリーン作戦に先立つこと六年、それはただ独り、文字どおり素手で始まりました。人が言う、象にアリが食らいつくが如くに始まりました。また、言いました、賽の河原に石を積むが如くと。また、言いました、ザルで水を掬うが如くと……。

この頃、悪臭放つ干潟に、連日ゴミが捨てられていました。周辺住民はもとより、行政当局も言いました。「あそこはゴミ捨て場になっている」と。

しかしそれは、今にして思えば、今日ある谷津干潟クリーン作戦の、その引き金、呱呱なる産声を挙げる、その契機となったと言えましょう。感謝——。行ききました。やりました。拾いました。担ぎました。入れました。引つ張り上げました。よじ登りました。汚れました。引きずりました。埋もれ、浸りました。這いつくばりました。持ち上げました……。

言われました。バカ、気違い、土人、クロマニヨン、売名行為、エイハブ、原住民、ヨソ者、乞食、汚ったねえー、臭えー……。でも、それらを精神的税金だと思いました。ゴミを拾う目の前で、ゴミを捨てたり、「無駄だよ」と、小便をする人もいました。

でも、私たちは少しずつ、それもほんの少しずつ勝っていききました。ちっとずつです。そしてそれを、毎日、春夏秋冬、風雨に関係なく、少しずつ積み上げていきました。

繰り返すうち、少しずつ、ゴミを捨てる人が減ってきました。少しずつ、協力してくれる人が出てきました。少しずつ、好意を持ってくれる人が増え、悪

く言う人が減っていきました。

その間、希望と失意、喜びと悲しみ、得意と落胆など、私たちはピンポン玉か寒暖計のように揺れ動きました。思いは千々に乱れ、身も心も「ぶつつぶれるんじゃないか……」と何度も思いました。

でも、あっちで少し、またこっちで少しと、谷津干潟はきれいになっていきました。そしてまた、あっちで一つ、こっちで一つと、その成果が形となって現れてきました。

ボランティア活動とはいえ、谷津干潟クリーン作戦の歩んできた道のりは、あまりに激しく活動的で、変化の多い、方法も多岐にわたった、心身共に大なる労を要するものでした。

谷津干潟クリーン作戦は、現在に至るまで、有形無形を問わずたくさんのものを産んできました。今も、これからも、産み、そして成し遂げてゆくでしょう。干潟の周囲にあるテーブルやベンチはその一例です。これらの流木は、かつて人が「ゴミ」と呼んでいたものです。

ならいぬよ

我を用木 ならいぬよ

動き、想いて 在るなるも

干潟の呼び声 あかんどけ

尽くして生かさん ひと心

ある会員は言いました。

「俺たちは、つまり、なんだよなあ、 干潟の下足番“なんだよなあ……”と。そのとおり、私たちは、干潟とそこに棲む生き物たち、利用する人たちの“使い走り”であり、“御用聞き”なのかもしれません。

何をしてくれるのかではなく、何をしてやれるかを、出来ないことよりも、



出来ることを、捜し、求め、実践してきました。出来ないことを教えるよりも、出来ることを教え、育て、成し遂げてきました。

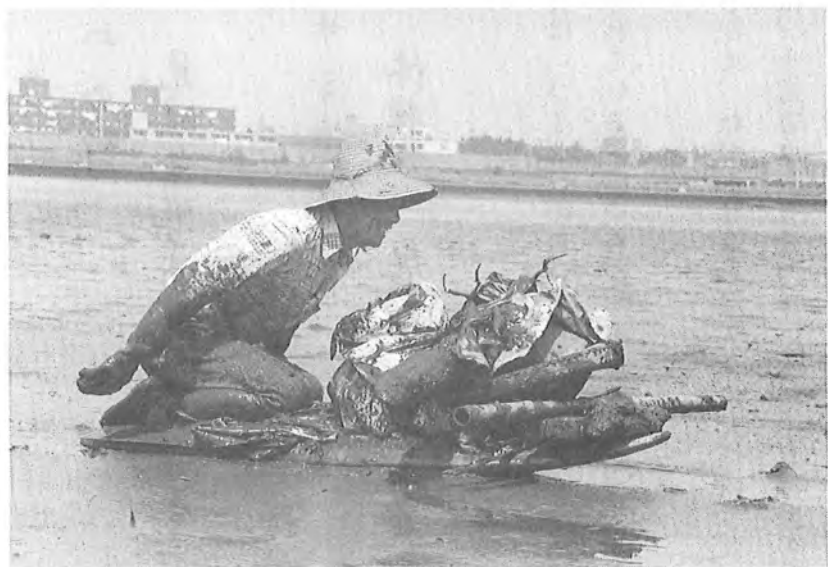
## 軽しめん

千瀉の重荷を そのたびは

ひとつ ひとつと 一つずつ

つよづき、 軽<sup>かろ</sup>ひの 我なれど

千瀉の呼び声、 聞きたれば



一 丰 斯 渴

## カニの群

見渡す限りに 甲羅干し

ハサミ振る

体操ガニの マスゲーム

六月三日は「ゴミゼロの日」だという。全国各地で、いろいろなクリーン作戦が計画されている。国や自治体が音頭をとってやるから、参加人数など大規模である。

それひきかえ、わが「谷津干潟クリーン作戦」は、いつもひがんでしまう。機動力は、十三万キロも走っている四十九年型の軽自動車一台と、ガタガタ

の一輪車が二台……。

まア、これでも、素手で一人で始めた頃に比べれば、人数、装備、そして實際の効果を鑑みれば、絶大なる進歩である。でも、せめて、国や県とまではいかなくても、地元の習志野市が、行政自ら先頭に立って谷津干潟でやってくれないかしら……。

ゴミゼロ運動。谷津干潟でも、「ゴミを投げたり捨てたりする人が少なくなったなア……」と思えるようになるまで、十年余りもの歳月が必要だった。ましてや国全体に、国民一人ひとりにその考えや行動が浸透するには、少なくとも、世代サイクルで見るとかなりの根気がいるだろう。

谷津干潟でのクリーン作戦もこれまでに、いろんなことが、いろんな時が、そしていろんな想いをもってして、今日までの道のりを辿ってきた。

クリーン作戦をして、“谷津干潟保存運動のからし種”という自覚に至った今、私たちは「静かなる闘志」を燃やし続けている。

草は萌す

カニは体操 空に鳥

水に魚群の帯 あまた

往時の ふかんど 想い出さん

初夏のいのちぞ ゴミ拾い

谷津干潟は今、初夏の生命の息吹に満ち満ちています。

「谷津干潟クリーン作戦」が、つまづき<sup>また</sup>転びつても、一〇〇回を迎えることができたのは、今日まで多くの方々の有形無形の協力があつたればこそ成しえたもの——。本当にありがとうございます。

私たちは、「初心忘るべからず」との古人の言葉のごとく、ここに心を新た

にし、その志操と決意を清明、かつ、確固たるものにしていきたいと思ひます。谷津干潟クリーン作戦は、氣候が暖かくなるにつれ、干潟の中央に向かつて、より速く、より深いところへと展開されていきます。それはもう、時には泥と水とゴミとの“格闘”の様相を帯びてきます。草むらや、周辺のゴミは軽くて汚れないので婦女子に一任。成年男子の役目は、「どんなに汚れても、後で水をかぶればいい」ということで、干潟の中の、大きな、重い、ドロドロのゴミをヤッツケに行くのです。三回も往復するとヘトヘトになります。

今年も、「干潟スキー」という“新兵器”をつくる計画です。夏には、この「干潟スキー」に乗ってスイスイ滑る姿が谷津干潟で見られることでしょう。

(一九八四・五 第一〇二回)

## 野鳥観察に来る人のために

ゴールデン・ウィークからバード・ウィークにかけて、渡り鳥の最盛期に入ります。もうすでに、先頭グループが続々と来ています。

ここ谷津干潟が、一年中で最も賑やかになるのもこの時期です。そして、これらの渡り鳥を観察に来る人も、この時期に最も多くなります。

大都市のすぐ近くで、また、団地や住宅地の中で、こんなにも多くの渡り鳥を観察できるところなんて、全国的に見ても、まず谷津干潟を置いてほかにはありません。私たち習志野市民が全国に誇るに足る、名実共に「渡り鳥の楽園」なのです。それは、地域社会の、私たちの郷土の、ボランティア活動の一つの“ケツ作”でもあります。

日毎のクリーン作戦は、あたかも彫刻のノミのようなものです。環境という

教材としても、谷津干潟は堂々たるものです。バード・ウィークの頃には、すっかり陽気もよくなり、干潟周辺の草も青々と茂ります。

谷津干潟はもうすっかりこの地域に根ざしつつあります。観察会に限らず、双眼鏡を片手に来る人、散歩がてらに来て、草むらやベンチでお弁当を広げている光景がたくさん見られます。今の谷津干潟は、そういう市民の数のほうがバード・ウォッチャーよりずっと多いのです。

今回のクリーン作戦は、できるだけ多くの人に来て、少しでも気持ち良く過ごせるようにしたいと思っています。その準備と受け皿作りに努力してまいります。

(一九八四・六 第一〇四回)



アシ原は

蒸し風呂如きの  
ゴミ拾い

雨降って

メダカの池の  
カエルさん

ゲロゲロ鳴いて  
うれしそう

紫陽花の、雨に濡れてすっかり梅雨らしくなった今日この頃。

もしかしたら、干上がってしまうのではないか、と皆んなで気をもんでいたメダカの池も、六月二十八日に降った雨で、やっと池らしくなりました。メダ

カの赤ん坊が産まれて、無事大きくなってくれればいいですね。

メダカの池には、ところどころにザリガニが穴を掘って棲んでいます。ゲンゴロウやミズスマシも、まだ小さいのですが、いっぱい泳いでいます。

二十四日の日曜日に行ってみると、ギンヤンマが五、六匹、水の中の杭にとまったり、水面すれすれにスイスイとのどかに飛んでいました。そしてなんと、カエルがゲロゲロ鳴いているのでした。

池のそこをゴソゴソ歩いて、マヤゴたちもこれからどんどんトンボになって夏の空を飛んでいくでしょう。今もこの先も——。赤トンボ、ムギワラトンボ、シオカラトンボ、ギンヤンマ、デンキトンボたちが、メダカの池で水を飲んだり、しっぽを水の中にチョコンと突っ込んで、卵を産んでいくのです。

谷津干潟の近くには、淡水の水溜まりが全くありません。だから、トンボやチョウ、コウモリだけでなく、コチドリ、ツバメ、セキレイ、カモ、スズメ、ヒバリ、オオヨシキリなどの野鳥たちも、水を飲みに来たり、水浴びや砂遊びにも来るのです。

そしてまた、子供たちもよく大きな声で「メダカの学校の唄」を歌いながら、泥んこになって、笹舟や砂遊びに興じている姿の見られるのが、この頃のメダカの池の情景なのです。

（一九八四・六 第一二回市民）



干潟の再生

夏雲の

湧くが如きの 想いもて

往住塵臥の 十年たれ

信ぜよほしや ふかんど の

器とちらん 船ちらん

昨夏の、暑い真つ盛りにスタートしたこの「谷津干潟市民クリーン作戦」も、早いもので、もう二年目にはいろいろとじています。

干潟のそばの自然緑地には今、夏草が青々と繁り、これが草かと目を見張るばかり。草むらに入ると、心地よい草いきれに“自然”を感じさせられます。

同じ夏草とはいっても、そのうちには早く生長するもの、遅く生長するもの

があります。いわば、夏草の第一陣、第二陣というようなくあいに、早いもの、第一陣の夏草は、今はもうすでに先のほうが薄茶色になり、枯れかかっています。また、あるものは、穂が見事に成長しきってふさふさとし、群生しているその草むらを風が吹くと、ゆらゆらと波打って揺れている光景も見られます。広い草原の中で、成長の違ういろいろな草が、縞模様 of 彩りを成している眺めは、とても気持ちのよいものです。

夕暮れのヨシ野の上では、もう巢立ったのでしょうか、親子連れのツバメの群が、毎日、あちこちでさえざりながら舞うように飛び交っている光景も見られます。

そして、ツバメたちはまた、時々メダカの池の水面をすべるようにして、水を飲みに行つて来ます。私たちはそれを見るのがとても楽しみです。暑かったきょう一日を偲い、夕風に吹かれながら見るそれは、涼味と清々しさを感ぜさせてくれ、心を洗ってくれるからです。

どうせ また

腰まで 水と泥ならは

パンツはくのが もったいない

はるかシベリアやカナダから、もうそろそろ、夜の狩人であるコミミズクが夜の草原に姿を見せる頃となりました。もしかしたら、すでに来ているのかも……。

草はらは今、緑の世界から茶色の世界へと、日一日、変わりつつあります。去年、私たちの掌から、「待ってました！」とばかりにネズミをさらっていった、あのコミミズクが、今年もこの谷津干潟自然緑地に来てくれるでしょうか。煌煌たる月明かりの下、メダカの学校の水面に、“夜の忍者”たる、そのはばたく姿を見せてくれるでしょうか？

私たちは毎日、メダカの池とそのまわりの草はらに、もらってきたパンのミミを撒いています。そしてそこに、いろんな野鳥たち——カモ、ゴイサギやコサギ、セキレイやヒバリやカラスなどが来ています。

ネズミも、泳ぎながらパンを食べていますが、やがてそのネズミを獲るために、連られるようにしてコミミズクがやって来るのです。

冬の谷津干潟の風物詩になれば、と楽しみにしています。

（一九八四・七 第一四回市民）



ギョロギョロ

鳴いてるヨシキリ 揺れ動き

葉すれの音も 涼やかに

ヨシ野やの空は 茜色

炎 天 下

もしすり あちこち にぎやかに

お日様 西に傾けは

それ咲け やれ咲け 月見草

「ゴミを拾うのが、何だか悪いような気がするなあ……」と、そう思っ  
てしまいたくなるような今の季節の谷津干潟である。

なぜなら、それは、干潟の中のほうはともかく、岸边近くのところ  
には、アシや水辺の草、カニやゴカイの穴が、すさまじいばかりに繁  
り、つくられているからだ。

草は、ゴミを拾うためとはいえ、足で踏み倒すのはかわいそう。また、カニ  
は巣穴から出て来て、みんな一斉に、そのちっちゃなかわいいハサミを振って  
「イッチニ、イッチニ」とばかりに体操をしていて、ゴカイはゴカイで辺り一  
面に、穴から「ブチブチ」湧き出ずるような音を立てているのに、そこを私た  
ちは足で踏みつぶして歩かないわけにはいかないのだから……。

じゃあ、干潟の中央のほう、岸から少し離れたところはどうかという  
と、こ  
れまたヤマトオサガニが、背中の毛が立つような大群をなして棲んで  
いるのである。

そこで、いろいろ思い悩んだ挙げ句、「鬼手仏心」ということで“合理化”して、んまあ、クリーン作戦を展開するのです。

カニさん、草さん、ゴカイさん、ごめんなさい……。

(一九八四・七 第一〇五回)

# 消滅間近 旅鳥の宝庫

## 習志野の大蔵省水面



海岸遊歩道などの通過予定地になっている「大蔵省水面」。

# 湾岸道の通過地

## 鳥類保護 全国一、百一種類も 連の調査

日本鳥類保護連は、鳥類の宝庫として知られる習志野の大蔵省水面と、習志野の海岸遊歩道に、湾岸道の通過地が予定されている。この通過地は、鳥類の宝庫として知られる習志野の大蔵省水面と、習志野の海岸遊歩道に、湾岸道の通過地が予定されている。この通過地は、鳥類の宝庫として知られる習志野の大蔵省水面と、習志野の海岸遊歩道に、湾岸道の通過地が予定されている。

### 公害対策委と共闘 保存運動へ

この方針、鳥類保護連は、公害対策委員会と共闘して、湾岸道の通過地を保存する運動を展開する。この方針は、鳥類保護連の代表者が、公害対策委員会の委員と話し合い、湾岸道の通過地を保存する運動を展開する。この方針は、鳥類保護連の代表者が、公害対策委員会の委員と話し合い、湾岸道の通過地を保存する運動を展開する。

# 京葉読賣

千葉支局 (〒280) 1-11-5  
 東京支局 (〒100) 1-11-5  
 大阪支局 (〒550) 1-11-5  
 名古屋支局 (〒460) 1-11-5  
 福岡支局 (〒810) 1-11-5  
 仙台支局 (〒980) 1-11-5  
 札幌支局 (〒060) 1-11-5  
 旭川支局 (〒070) 1-11-5  
 釧路支局 (〒090) 1-11-5  
 帯広支局 (〒100) 1-11-5  
 旭川支局 (〒070) 1-11-5  
 釧路支局 (〒090) 1-11-5  
 帯広支局 (〒100) 1-11-5  
 旭川支局 (〒070) 1-11-5  
 釧路支局 (〒090) 1-11-5  
 帯広支局 (〒100) 1-11-5

伝統の味と本格的日本料理とどぞ



1F カウンター・お刺身  
 2F お酒・和食  
 3F 個室・宴会場  
 4F 大宴会場・ホール

日本料理 松場  
 懇親会・予約受付中  
 京成千葉駅前  
 千葉駅前 土曜1-11-5  
 0474(2)1552

## 瀉スキー

干瀉のよん中 いい気持ち

鳥と 魚と カニたちが

ぐつりにいっけい オレ大将

今年もまた、去年に引き続いて「アマモ」が出てきました。まだ小さいのですが、これから成長していくことでしょう。

「アマモ」を、私たちは干瀉に行くたびに見守っています。去年は、偶然とか、たまたま——という考えもありました。でも、これで、本格的に干瀉が甦りつつあるということの、一つの実証として見る事ができると思います。

さて、瀉スキーと干瀉の中央部のゴミ……。特に大型のゴミの清掃は着実に

進められています。

ゴミはゴミでも、干潟の中のほうのゴミは「中身が濃い」ゴミです。それは、回収に時間がかかり、重くて、非常に重労働だからです。おまけに、水に濡れ、汚れ、まさに格闘技、スポーツだからです。

これから日増しに寒くなります。冬將軍のやって来る前に何とか大半のゴミを平らげたいと、私たちは毎週頑張っています。地下足袋、ロープ、一輪車、そして潟スキーを主役にして……。

それと同時に、毎週、干潟で市民のために望遠鏡、図鑑を自由に貸し出し、説明に当たっているのです。鳥の看板出し、幸福の黄色いハンカチの旗を掲げ、「谷津干潟クリーン作戦」の旗を出し、そして干潟の生物標本の展示をも、し続けているのです。

「おおー、いそがしい!!」

(一九八四・八 第一五回市民)

汗をかく

値打ちありなん 夏の日の

干潟の作業 終えてから

茜の空に 澄みわたる

風と 水面と 鳥の群れ

盛夏……。

一日の作業が終わった、夏の干潟の夕方は、実にさわやかだ。

それは、ただひと言、「汗をかくだけの値打ちはある……」と思わずにはいられないからである。これは、ここ、夏の谷津干潟に来て何かをやった者にしてこそ初めて、心と体で実感出来ることなのかもしれない。

「いいスポーツだ」とは、共に作業をしている長塚進吉氏のいつもの言葉である。もちろん、われわれも全く同感である。

ほんとうに、夏の干潟、その夕方は、きれいなのだ。空も、雲も、鳥も、水面も、そして草原もが、何か澄みきった清々しいものなのである。谷津干潟におけるボランティア活動の、もっとも大きな「報酬」の一つである。

干潟に周辺住民が最も数多く来るのも、こういうとき。時間にして、午後三時四時頃から、六時頃である。

われわれが最も忙しくなるのもこの時間帯である。これまでの六年間、「一般市民のために、望遠鏡や図鑑を自由に使用してもらおう」ということをやってきている。やってきて、よかったと思う。鳥の絵看板や生物標本、あるいはパインレットが「モノを言う」のである。

われわれのほうも、それまでの作業活動から、今度は、市民のために観察の仕方を教え、説明し、話を交わすことに重心が移ってゆく。

絶え間なき干潟の作業と、干潟の保護のため、谷津干潟を広く深く認識して



もらうための一般市民との交流。この二つの車輪を、夏の今、暑くても、われわれは回し続けている。

### あずま屋の

ためにヨシ刈り 屋根をよみ

いたたつ汗も ちんのその

流した分だけ やがてのち

みんなが 小屋で涼しいよ



いそしぎ

## フジツボを

いっばいつけた カブトガニ

ながく棲んだか 棲みよくて

カブトガニが谷津干潟で見つかりました。体長五十五センチ、幅二十九センチの堂々たるものです。

発見者は、谷津干潟のすぐ近く、秋津団地にお住まいの島田善一さんです。去る九日（日）の午後二時頃、子供さんのためにカニを捕ってやろうと思い、干潟の中を歩いて見つけたとのこと。

知らせを受けた私は、「まさか？ でも、ホントかも……」と思いながら島田さん宅に駆けつけました。

カブトガニは“身の振り方”が決まるまで、バスタブに入れて飼っておくと

いうことです。おかげで島田さんのうちは、お風呂に入れないので、シャワーで我慢しているそうです。

私たちもできるだけ協力することにして、十八リットルのポリタンクを二つ用意し、毎日、海水を汲んでは島田さんのうちへ届けています。

「谷津干潟でもカブトガニが見つからないかなあ……。棲むには恰好のところなんだがなあ」と、時々私たちは話していました。ところが、今度それがとうとう本当になってしまったのです。

谷津干潟で繁殖したとは思えないけれど、少なくとも生息できる環境であることは実証されたわけです。誰かが放したのでしょう。でも、もしかして産卵でもしていたら、これからも、ほかにも姿を見る可能性があるわけです。もしそうだとしたら……。そう考えると胸がわくわくしてきてしまいます。

他愛ない夢かもしれませんが……。でも、楽しみがあるっていうことは、いいですねえ。

（一九八四・九 第一〇九回）

## 水の中

浸かりて拾うも　この頃は

肌は冷たい　秋の風

風に冷気を感じる頃となりました。

水に入るのもちよっとおっくうとなり、勇気が要ります。わずかひと月前の、あの水と泥にまみれてもへっちゃらだった夏の頃が、懐かしくさえ思われます。澄んだような干潟の中では、夏以来、大型ゴミの清掃が続いています。シギやチドリ、カモメの声が水面の上に響きわたる中でやっています。ゴミは、北風の吹く寒い季節には南側（テールやベンチのあるところ）に、南風の吹く季節には北側に集まっています。

やってみてわかったのですが、干潟の中の広い中央部にはかなりのゴミがあ

るのです。岸から見ている限りでは、ただ見えないだけなのです。それは、目につく大型のゴミよりはるかに多く、砂や泥のために流れなくなってしまった、ビニール、プラスチック類、ビン、カンなど、いわゆる無機質のゴミです。タイヤなどもそうですが、単に捨てるのではなく、まず掘って、それから引っぱり出すなり、持ち上げなければなりません。それに、潟スキーだけでは間に合わないのです、現在、岸からロープを投げてもらって、ゴミをゆわえ、引き揚げています。

体を動かしているときはそうでもありませんが、じっとしているときや、作業が終わり、すぐ着替えないでいるときは、手足がしびれてきます。会員の間から、しんどい大型ゴミのお相手は来年の春までひとまずお預けにしておこうか、という声も出ているこの頃です。（一九八四・一〇 第一一一回）

## カモメおばさん

私たちが月二回出している『谷津干潟クリーン作戦のご案内』、実はこれは中村容子さんのタイプによるものです。

一年半ほど前、中村さんから「クリーン作戦の案内の原稿を私にやらせてください」と協力の申し出があった。

中村さんは、干潟のそばの秋津に住んでいる。秋津団地が出来て、最初の頃に入居したという。昭和五十五年三月。折しも、その年のその月に「第一回谷津干潟クリーン作戦」の名が社会に出、その名のもとに清掃活動が行われたのであった。

中村さんは、新聞で干潟とクリーン作戦のことを知っていたという。引越して来た翌日が第一回クリーン作戦の日だったとか。また、秋津に来る以前か

らも、時々谷津干潟に来ていたという。

「わたし、何百と並べられたゴミ袋や、刺き出しのゴミの山も見たことがあるのよ。いつだったか、『婦人公論』で森田さんの記事を読んだことがあって、森田さんという人、そんな時からどんな人かと思っていたの。もっとこわい、近づきにくい人かと思っていたわ」と中村さん。

中村さんはきれいな人だ。気さくで、親切で、声もいい。自宅のそばの秋津サッカー場で行われるサッカー・日本リーグのアナウンスをしている。その他、少年サッカークラブのマネージャー、福祉センターでの点字奉仕、身体不自由者を助けてステンドグラス作りの手伝いもしている。

干潟にあるきれいな字で書かれた看板は、すべて中村さんによる。また、クリーン作戦も、干潟の周りのくずかごのゴミ、草むらのゴミや空き缶などの清掃は、殆ど中村さんがやっている。

そういう中村さんの顔を、谷津干潟のカモメやカモたちが覚えてしまったらしい。なぜなら、中村さんが彼らにパンを投げに行くと、堤防の上で干潟に向



かつて立っただけで、彼らは中村さんの前に寄って来るのである。

中村さんはこう言った。

「わたしね、カモメやカモが、待ってましたとばかりにみんなして寄り集まってくるのを見ると、思わず心の底から「ニカーツ、ニカーツ」ってなってしまうのよ」と……。

雨の日も風の日も、雪の降りしきるときも中村さんは、根気よくパンのミミをもらいにまわり、そして投げてきた。いつしか野鳥の識別能力もついてきた。きょうも、人呼んで「カモメおばさん」なる中村さん、パンのミミを投げ、ゴミを集め、見に来る市民に挨拶をしながら、野鳥や干潟の説明に懸命である。

(一九八四・一〇 第一七回市民)



動くずかん

## 石川 勉 氏

干潟がまだ、その名すら知られていなかった頃からの、最も古い友がいる。谷津干潟を語るに絶対に欠かせない人だ。石川 勉氏、この人である。

昭和四十三年当時より、最低、週一回、店の定休日である月曜日に、東京・日本橋の浜町から、雨の日も風の日もオートバイで通い続けている。

谷津干潟と、埋め立て地の渡り鳥のこと、その知識と経験、技量などにおいて、彼の右に出る人はいまい。自分で決心し、すべて手弁当である。

彼と知り合ったのは、サンドパイプが唸りをあげて海水と土砂を噴き出しているときだった。京葉港に、全国最大のコアジサシやシロチドリのコロニー（集団営巣地）に一万余もの巣がつけられた。その頃彼は、五〇CCのバイクで来ていた。広大な埋め立て地、砂漠と草原の中で、点の如き彼の姿を見ていた。

埋め立て地で顔を合わすのは、彼ぐらいしかいなかった。埋め立て地には、建物は何もなかった。連絡らしきものも、殆どなかった。

ある夏の日、コアジサシ繁殖調査のとき、まぶしく光る貝殻とかけろう揺らめくコロニーで、彼はテントを張って野宿し、巢を見張っていた。彼も私も、まっ黒に陽焼けしていた。

その日は大砂塵の後だった。私が近づくと、彼は上半身裸でテントから出てきた。二人とも放浪者のような格好だった。

「よおー、よく来んなあ。すげえ人間がいるなあと思ってたよ」と、お互いに、初めてそんな言葉を交わしたのだった。

その後、彼とはよく食事やコーヒーを飲みに行き、いろんな体験と思い、情報交換し合った。二人の付き合いはそのまま、干潟と埋め立て地の移り変わりでもある。

(一九八四・一一 第一八回市民)

コロニーは

卵とヒナの 花盛り

次々つよそつ 束の間の

こころかなければ そらに産む

埋め立て地は今、渡り鳥の繁殖期で、いたるところで卵が産まれ、そしてヒナに孵っています。

谷津干潟のまわりの草むらでも、セツカ、ヒバリ、オオヨシキリ、カルガモ、バンなどが繁殖していますが、ここ、埋め立て地の最先端、その狭い片隅ではコアジサシ、シロチドリ、コチドリたちが、いまを盛りと営巣しています。

そのすぐそばでは、道路造成工事が進められていて、ダンプやパワーショベル

ルが唸りを立てています。道路はコロニー（集団営巣地）のど真ん中を通るもので、三十メートル先まで迫っています。そして、コロニーの反対側の東側でも橋の工事が始まり、鉄パイプを打ち込むステイムハンマーの音がコロニー全体に響きわたっています。それだけでなく、コロニーの中をぬうようにして釣り人やサーファーの車が通っていくのです。

また、ラジコンやモトクロスもコロニーの中でやられています。そんな車の通るところからわずか五十センチのところさえ、鳥たちは卵を産み、ヒナを育てているのです。しかし、すでもうたくさんさんの卵やヒナが、つぶされたり、とられたりしてしまいました。

毎年、繁殖調査中、それらのあとを見ることほど、やり切れなく、がっかりすることはありません。繁殖期が終わる八月の中旬まで、一羽でも多くのヒナが無事に育ってくれることを、強く願わずにはいられないのです。

メダカの池の ヤンマたち

ホカケやナンガで 飛び交ひて

くっばで 波紋 つくってる

うれしいことがありました。

谷津干潟に、新たに「藻」が発見されました。場所は干潟の奥部、旧遊園地の前面です。

ここは、海から、すなわち潮の流入する水路から最も遠いところにあります。長さ十センチ程の緑色のかたまりがハカ所で発生していました。五月中旬にここでのクリーン作戦を開始して以来、約ハカ月目のことです。

石、ガラス、ビン、カン、コンクリート、シート、ビニール、鉄骨や鉄板、杭やロープに金物類など、その他種々雑多なゴミを拾い、掘り出す。スコップ

や熊手で干潟を耕す。石やガラスを取り除いて砂をまく。すると、過去にもそうだったが、泥質のところにも棲んでいるカニは着実にその数を増す。

砂質のところにいるチゴガニやコメツキガニ、そしてゴカイも同じこと。干潟の呼吸を妨げているゴミを取り除いてやると、いたるところで日増しに巣穴とその範囲が大きくなっていくのです。

ゴミを取り除く、カニやゴカイが増える、カモたちがそれを食べようと穴を掘る、塩が砂を洗う、この繰り返しで干潟は浄化され、藻の発生を見、さらにその藻がまた浄化を助ける。私たちがほんのちよつと、ゴミを取り除くといふきっかけをつくってやるだけで、自然の営みというものはこんなにも大きな働きをしてくれるのです。

とはいえ、“ほんのちよつとのきっかけ”のために、ゴミ袋三種類、手袋も三種類、長靴を二種類と、その用具を揃えておくのも大変ですし、また、干潟の周囲、水際、もぐるところ、浅いところ、砂質と泥質のところというぐあいに、場所によって方法を変えていくのも大変です。



しかし、何より大変なのは、地味な根気のいるこの作業を継続させることで、いまある干潟は、この“継続の力”の結果であるといえるでしょう。

(一九八五・八 第一三二回)



ヨシゴイ

## ゴミすくい

細かいゴミはすくうに限る。数センチからミリ単位の浮くゴミは、拾いようがない。そこで思いついたのが、ザルですくうことである。大きいのは拾いようがあるが、小さいのとなると、全くと言っていいほど手が出なかった。

去年のある日、会員の長塚進吉氏と五十嵐吉夫氏が考えたのであった。時は大潮、水いっぱい。波がタツプタツプと護岸に当たっていた。ヨシに囲まれた水面には無数のゴミが浮き、**“群れ”**を成して上下にうねっていた。

「おおい、何か玉アミみたいなもの、あるかねえ」と、干潟を見ていた長塚氏が叫んだ。

「ああ、そういえば車の中に放り込んであったつけ」と五十嵐氏。

二人とも水の中にザブザブと入って、腰を屈め、すくいだしたのである。そ

れはまるで、子供の頃によくやったあのドジョウすくいや魚採りそのままであった。

ついこの間も、去年にならってやってみた。今年は玉アミから「ふるい」に代えた。ザルも試しに使ってみようと思う。さらに、すくい取ったゴミを入れるため、大きなカゴがあると便利だ。何しろゴミを袋に入れる前には、できるだけ水気をきっておかねばならない。つまり、ザル↓カゴ↓袋の手順である。

谷津干潟で細かいゴミの集まるところは決まっている。だから、時々やればよい。

今までのクリーン作戦は干潮時が主だった。これからもそうだ。が、満潮時にはまたそれなりのやり方があったのだ。新たな方法が追加され、クリーン作戦が補強されたわけである。

ああ、それにしても、日常的な干潟の作業のために、早く道具小屋が欲しいなあ！ それともわれわれ自身で建設してしまおうか――。

## 春が 報いてくれる

—— 今がいちばんつらい時 ——

干潟の作業、とりわけクリーン作戦は、冬が最も厳しい。水に濡れ、泥や砂で汚れて北風に吹かれることの多い冬の日々——。

寒い日には、周辺の潮溜まりや水際、砂や泥が凍って固くなっている。

水のところは、足で蹴って氷を割り、ゴミを拾える。が、地面のところのものは、固くくっついてしまつて、なかなか取りにくい。

同じ干潟でも、北側、つまり旧遊園地や谷津三丁目のほうは暖かい。北風が堤防や木立、建物によって遮られるためである。

寒い北側と比べて、ここは約一カ月程早くカニや水辺の草が顔を出す。特に堤防の真下は、この寒い今なお、カニの砂団子が見られるほどだ。真冬の天気の良い日、何度かアオダイショウが寝そべっているのを見たことがある。

これから最も、気温が低くなる日が多いので、比較的暖かい干潟の北側でのクリーン作戦に力を入れていきたい。

そして、この冬のクリーン作戦は、やがて来る春に、その成果が最もわかりやすく、はっきりと表れてくる。それは、カニやゴカイ、あるいは水辺の草という形の「絵ことば」という結果、姿でもって表れてくるのである。

なればこの時期、希望と忍耐をもって、谷津干潟クリーン作戦は前進する！！

(一九八五・一二 第一四二回)

「いったい誰が」

十一月二十五日。干潟のすぐそばにある「秋津五号児童公園」の中にあるトイレを使った。ここに来るのは久しぶり。上げ潮で速い流れの濤に腹まで浸ってゴミを運んでいた。が、どうやら冷えてきたらしく、「大きい便意」をもよおした。ひと区切りつけて、トイレに向かった。

ドアを開けて、びっくりした。きれいなのだ。何も落ちてなく、すべてきちんと拭いてあった。「いったい誰がやってくれたのだらう？」と思った。

実はこのトイレ、数カ月前までは、私が清掃して、ペーパーも備えていたのだ。その頃は、私がいくらやっても、いつ行っても汚れていて、ペーパーはよくメチャクチャに使われていた。水もわざと出さばなしということもあった。

ある日、私は試しに、何もしないで、その後の様子を見るということにした。それから二回ほど使ったが、やはり汚かった。十一月二十五日のときも、「やはり汚いだらうなあ」と思いつつ入ったのであった。

うれしかった。感謝した。そして、カづけられ、やる気が湧いてきた。

因みに、干潟周辺のトイレは、以前は六カ所あった。みんな公園の付帯施設として造られたものだった。しかしその後、使えるようになっていたのは、干潟に隣接するこの五号公園のトイレだけだった。ほかの五カ所のうち、二カ所は撤去、三カ所は使用不能となってしまった。

原因は、石や砂やカン、ビンなどによるゴミのため、すなわちイタズラと汚れによるものである。干潟のすぐそばの「マーブル児童公園」のトイレも近々撤去するというのである。

五号公園のトイレは、干潟に来る人のため、ここだけはどうも、できる限り清掃し、使用可能な状態を保つべく努力してきた。

地域性やモラルなどは、道端のゴミや公衆トイレに最もよく表されるものだ



ろう。「誰も見ていない。自分しか見ていない」という時やところにこそ――。  
すなわち、古人いわく、「汝「ひとり」をつつしむべし」と。宣なるかな。

(一九八五・一〇 第二九回市民)



コアジサシのヒナ

借問す

汝を育てー ふつそとの

海が 何をか 求めーか

なれば 汝が ふつそとを

守るに 何をか 求めんや

今度、谷津干潟クリーン作戦に「潟スキー」が本格的に使われるようになり  
ました。

この十年、いつも見ていただけであった「積年のゴミ」を掃討し始めました。  
動かない、沈んでいるゴミを清掃するのです。

まだ試作の域を脱しない「潟スキー」ですが、従来の歩くことに比べれば、

その労力といい、拾う量、そして時間も、その威力は大なるものがあります。

「瀉スキー」の使用により、谷津干瀉クリーン作戦は、さらに新しい展開を繰り広げることになりました。今まで全く手の届かなかった、ただ見ているだけでしかなかった干瀉の中心部へ、中へと、その広い面積を完全に徘徊できるよになつたからです。

不思議なことに、岸から遠く離れ、干瀉の真ん中っていると、案外、鳥たちは逃げなく、近くまで寄つて来るのがわかりました。そして、面白いことに、自分のすぐ近くにカニや魚がいつばいいるのを見、彼らに取り巻かれていると、自分も、カニや魚に、その仲間になつたような、そんな気分になるのです。

地下足袋のほうが長靴よりも断然使いやすい、「瀉スキー」によるクリーン作戦は、全身泥だらけ、ずぶ濡れになります。かなりの重労働です。でも、素晴らしいスピードで干瀉の上を滑って行きます。そしてそれはまた、ゴミとの「格闘」でもあり、「スポーツ」とも言えるでしょう。

さらば 我が愛車よ

「なあオマエ、よく走ってくれたなあ。ありがとう。疲れたろう。ご苦労様」。  
走行距離二十五万五千メートル。西は荒川河口の葛西から、東は花見川  
河口までのあの広大な埋め立て地。約三千ヘクタール。

こんなボロボロになっちゃって……。オマエのそのボディに描かれた絵は、  
“動く図鑑”として、「谷津干潟」という名が知られていなかった頃、とつて  
もよく宣伝してくれたよ。

砂あらし、泥水、草原、滝のような雨、砂漠のようなところやデルタ地帯の  
ような粘土のところ、雪やあられ、木枯らし……。オマエほど埋め立て地を走  
ったやつはいまいよ。そして、ずいぶんいろんな人に乗せたなあ。

いっぱい、いっぱい思い出があるよなあ。懐かしいぜ。その時その頃の実感

がこみ上げてくるよ。涙が出そうだよ——。

京葉ホンダの小林大光さん、よく面倒見てくれた。ありがたいことだ。

とうとう死の宣告が下されちゃった。

クリーン作戦、ベンチや草地や小屋の保存。オマエ、その小さなボディで、ほんとうによくがんばったよなあ。

オレも、そして谷津干潟だって、オマエを決して忘れないぞ！ オマエとオレと谷津干潟は、いつも三位一体。保存運動の中で、オマエ、立派に大役を果たしたんだからな。

(一九八七・八 第五一回市民)

谷津干瀉　　さまざま

十月二十五日（日）、雨上がりの午後。坂梨さんの奥さんが干瀉に来た。

が、私は、顔は見覚えのあるものの、とっさに名前を思い出せなかった。母子三人、女の子は自分の自転車に、小さい男の子は奥さんの自転車の荷台に乗っていた。降りて、「こんにちは」と声をかけながら近づいてきた。目が、まっ赤だった。涙のせいだ。泣いていた。その時になつてやつと、「ああ、そうだ」と、名前がわかった。

「やつと来ました。早く行こう、早く行こうと思ってました」。奥さんは続けた。「お父さんを連れて行かなくっちゃ……。きつと干瀉に行きたがつてるんじゃないか、と思つてね。それで、今日やつと来られました」。何度も目頭を押さええながらの言葉であつた。

「お父さん」、ご主人の坂梨さんのことである。彼は干潟には来ていない。あれ「から来られなくなったのだ。かつてのあの姿はもう、干潟にも、広い埋め立て地にも、決して見られない。昨年九月、若干四十一歳の若さで心筋梗塞で亡くなったから。」

坂梨氏とは三年程のつき合いだった。干潟で知り合つて以来、埋め立て地、喫茶店、食事、鳥の情報……、いろんなところへ行動を共にし、いろんなことを共にした。

最も印象に残っているのは、真冬の夜中、埋め立て地のアシ原でコミミズクに餌づけをしたこと。吹きつさらしの中で、コミミズクの餌にするネズミを捕つたことである。「かわいそうに」とつぶやきながら――。

「お父さん、今日やっと干潟に来られて、きっと喜んでいると思います」。  
谷津干潟、これからもしっかりと守っていかなければ――。



## 農ゼミ 関東ブロック大会へ

学生との「対話交流会」なるものと呼ばれて行く。十二月六日（日）。麻布大学（相模原市）。

今回のテーマは、「意見を出すのは簡単だけど、今、振り返ってみよう——現場に帰って」だという。

市内袖ヶ浦に住んでいる農工大二年生の碓井敏宏君から頼まれた。彼は熱心に農ゼミをやっているらしい。十月頃初めて千潟に来た。「ふかんど通信」を読んで、クリーン作戦に参加したくなったという。体格、姿勢共によく、気持ちのいい青年だ。口数少なく、来ると、さっさと千潟に入ってはゴミを拾っている。

最初、彼から農ゼミの参加を頼まれたとき、行こうという気持ちは全くなか

った。学生相手のこと、常日頃より私にはあまり関心がないのである。ましてや、クリーン作戦のある日曜日にまる一日を費やして出かけるなんて、これまではとんどやったことがない。第一、相模原市は遠すぎる。

だから断った、何回も。農ゼミと干潟のクリーン作戦なんて、まるつきりピンとこなかったせいもある。

それでも、彼は相変わらず干潟に来て、黙々とゴミを拾い続けていた。そして「——それでもダメですか」と何回も言う。で、会員も私もなんだか気の毒になって、どうどう「森田さん、出てあげれば……」ということになってしまったのである。だって、断ると、そのたびにじっと考え込むのだから。

農ゼミが何たるか、よくわからないが、学生と交流を持つことにした。

「彼、もしかしたら、農ゼミがすんだら、干潟に来なくなるかもしれないよ」という声もある。まあ、それでもいいじゃないか。

## 百万円の通帳と印鑑を拾う

拾ったのは、最近仲間に入ってくれた田中君である。二十五歳。建築技術関係の仕事をしている。自分なりのテーマをもち、自分でやることを決めて、一人の時でも、クリーン作戦の旗を立て、さっさとやっている。

一月十七日、テーブルとベンチが並んでいる前のところの干潟の中で拾った。黒のアタッシュケースに入っていたという。

私はたまたまその場に居合わせなかったが、パークタウンに住む清橋さんが谷津交番に届けたところ、紛失届が出ていたという。おそらく盗難にあったものではない。それにしても、百万円とはすごい！

七年ぐらい前だが、私は女性のバッグを拾ったことがある。住所氏名が書いてあったので届けると、高校の下校時ひったくりに遇ったという。犯人は、中

に金目のものがなかったのでこの近くに投げ込んだのだろう。

クリーン作戦は、単なるゴミ拾いではない。ゴミといい、捨てられ方といい、干潟に来るいろんな人間といい、一つの社会学でもある。

„生きたゴミ“もある。犬や猫の子供を何匹も捨てていく。かなり大きくなった犬や猫を、ビニール袋に入れて干潟に放り込んでゆく。袋がゴソゴソ動くので近づいてみると、泥水にまみれて、苦しがつて目をむき、必死になって出ようとしている。ヤシの実や軽石だって流れてくる。

もし百万円の現金で、それをみんなが知ったら、われもわれもとゴミ拾いに来て、クリーン作戦は„大繁盛“するかも!? が、これは甘いというものかもしれない。

(一九八七・一二 第五五回市民)

## ノリとタゲリ

今、谷津干潟に大きなノリが育っている。護岸からもはっきり見える。黒々とした房が光っているから、すぐわかる。

場所は、東側水路が干潟に入り、そこから続くミオの中。大きな石の上と、干潟に突き出た竹に発生している。干潟に降りてその辺りを歩くと、そこそこにくっついている。杭とか、ロープとか、流れ着いた袋などに――。

きっと、沖の方からノリの種が流れてきて、そこかしこに根づき、すくすくと育っているのだらう。クリーン作戦にとつて、大きな励みであり、喜びであり、同時に干潟の環境のパロメーターでもある。

環境といえはもう一つ、ここにきて明るいニュースが入ってきた。それは、現在谷津船溜まりに流れ込んでいる下水が、三月末に止まることである。習志野市が進めている下水道工事で、「菊田第二号汚水幹線」が芝園にある汚水処

理場へ接続されるからである。今後、東側の環境変化が楽しみである。

また、十日ほど前からタゲリが姿を見せている。夕方、ザッと確認しただけでも十八羽。よく観察すればもつといるに違いないが、こんなにも多く来たのは初めてである。

タゲリは本来、真水のところにいる鳥である。内陸性で、田んぼなどの水辺や湿地の鳥とされている。それが、三年ほど前にも七羽来たことがあるが、かつてはゴミだらけだった「谷津干潟クリーン作戦モデル地区」のところで、ゴカイを餌にしている。干潟の他のほうへはあまり行かない。おそらくここは、二つの水路から最も遠く、干潟とアシ原が複雑な形で入り組んでいるからだろう。それに、干潟の中で最も塩気が薄いこともある。さらに考えられることは、本来のすみかである田や湿地が開発で次々と姿を消し、半ば追われて来たのではあるまいか。

(一九八八・一 第五六回市民)

さあ、春だ、春だ

カニが穴から出てきた。ヒバリの声も毎日聞くようになった。四月下旬には谷津干潟クリーン作戦が二〇〇回目を迎える。それに合わせて干潟の大写真展もやる。「小さな干潟の物語」という名で、いままでの写真展とはひと味違う。谷津干潟に来るいろんな人の姿、干潟との触れ合いの姿の写真展だ。とん汁やおしるこなどもつくろうか。潟スキーで“潟リンピック”の計画もある。

干潟は、雨や風の吹きさらしのところだ。だから春の温かい季節がひとしお待ち遠しいのである。

干潟のベンチの草むらも、もうすぐいつせいに若々しい緑が伸び出す。メダカの池ではカエルが卵を産んだ。ことしもメダカを放とう。ツバメがいつも、巣づくりのためにくちばしでこの池の粘土をくわえてゆく。アマガエルは今年

も声を聞かせてくれるだろうか。シヨウブの花も咲くだろう。

六年がかりのメダカの池、今なお作業中である。夕方、作業を終えて離れると、すぐにカルガモが入ってくる。

谷津干潟クリーン作戦はまた“語らいの場”でもある。会員のみならず、いろんな人たちが来る。だから、例のブックレ葦小屋“いそしぎ”は集会所だ。散歩の人、通りがかりの人、話を聞きに来る人など、実にさまざまである。とくに、地元小学校の子供たちが来てくれるのがうれしい。つまり、干潟に何か用がある人は“いそしぎ”に來ればいいのだ。

谷津干潟は、コミュニケーションの場である。観察舎ができて、この傾向やいままでの経験の蓄積を生かしていきたい。

そろそろ渡りの季節が始まっている。春の鳥やシギ、チドリも増えてきた。

若草の季節とともに、干潟とその周辺の事業計画もいよいよ動き出す。



谷津千瀉はこのごろ 元氣が出てきた

大滝俊隆写真展

——小さな千瀉の物語——

これから五月下旬にかけて、渡り鳥が一番賑やかになるときだ。ゴールデンウィークからバードウィークは恰好の時期。

千瀉のまわりの草地も、日一日、新緑の若草がぐんぐん伸びている。休日のおきなどは、バードウォッチャーよりも、散歩や弁当を食べに来る市民のほがずっと多い。習志野のような狭いところでは、ホッとするところ、広々としたところがないためと聞く。

つい先日、タレントのタモリやハナ肇が来て、テレビや映画のロケーション

が行われた。ロケをしていることが近所の人に知れると次々に見物の人ばかりができて、私たちの会員の中村容子さんも人出整理を手伝った。

いままで、谷津干潟は自然保護の面からいろいろ採り上げられてきたが、これから周辺の整備が進めば、映画やテレビの舞台としてだけではなく、あらゆる面で脚光を浴びるようになるだろう。

そんな折に大滝俊隆氏の写真展が開かれる。干潟におけるさまざまな人たち、ウサギや猫も入っている。谷津干潟の新しい“切り口”である。

準備はすっかりできた。あとは天気が良いのを期待するだけ。一人でも多くの人に見てもらいたいと、会員一同、心待ちにしている。

(一九八八・三 第五八回市民)

### 三郷から子供たちがやってくる

六月五日、三郷市北郷小学校六年生と父兄、先生が谷津干潟に来ることになった。PTA行事として、総勢一六〇人ぐらいという。

幹事の人の話では、最初、クラスの行事として予定したのが、話が広まり、学年でということになったとのこと。

先日、役員の方が下見に来た。子供たちに、泥んこ遊びや草むらを駆け回ってもらいたいそうだ。谷津干潟がすっかり気に入ったらしい。

去年、五、六人の子供が来て、干潟の中で泥にまみれ、のたうって遊んでいた。今年は、思い切って泥だらけになってもいいよう、着替えや水道ホースも用意するという。

子供たちに干潟の話や運動のことを話すように頼まれているが、世代も育つ

た環境も違う、海なし県・埼玉の子供たちに、どうやって話そうか――。

カニの捕まえ方を教えてやろうか。潟スキーにも乗せてやろう。特に潟スキーは、単にすべるといふことだけでなく、カニのいるところ、巣穴をじかに見たり、見ているだけだった鳥のいるところに自分たちも行くといふことに興味を持つだろう。

今までいろんな子供たちと交わってきた。それらを通じて実感したことは、子供の神経と体は実にやわらかいといふことである。初めて干潟の泥の上を歩くときはおっかなびっくりであるが、たちまちのうちに上手になつてしまう。それと同じことが潟スキーにもいえる。教えてやると間もなく、スイスイとすべるようになる。

(一九八八・四 第五九回市民)

## クリーン作戦 一本化

今度、「谷津千潟クリーン作戦」と「谷津千潟市民クリーン作戦」を一本化する。

「谷津千潟市民クリーン作戦」は、ちょうど五年前に誕生した。昭和五十八年の市議会議員選挙に立候補したある候補者が「千潟の保護もやりたい」というので、それじゃわれわれだけでなく、より広く市民に参加を呼びかけようということから始めたものだが、その中心となるはずだった候補者は、当選後の「第一回市民クリーン作戦」に來ただけで、次第に千潟から遠のいていった。

千潟にゴミはいくらでもあるので、これはこれでいいと思って、われわれだけで続けていた。しかし、五年待っても何の音沙汰もなく、クリーン作戦を二つに分けておく意味もなくなった。また、「谷津千潟クリーン作戦」と「谷津千潟市民クリーン作戦」とどう違うのか、と尋ねられることもしばしば——。

いっそのこと一本化してしまおうということで、「谷津千潟市民クリーン作戦」

は今回、六〇回目を最後に幕を閉じることとする。

そんなぐあいでは、公のクリーン作戦は月三回ということになった。つまり、第一、第三日曜日と、第四火曜日である。もちろん、われわれのクリーン作戦は、毎週日曜日、そして小規模には毎日やっている。

振り返ってみると、クリーン作戦も少しずつその内容が変わってきている。

初めは、文字通り「ゴミ拾い」だった。が、次第に会合、情報交換、相談、そして市民のための観察会、説明も兼ねるようになった。いまはまさにその混合——ミックスされた格好で進んでいる。おかげで地域の方々には、「日曜日には干潟に行けばいつも何かをやっている……」と知られるようになった。

このたび、干潟の保存も決定し、今秋には念願の国設鳥獣保護区指定となる。これからも、「グリーン作戦」という環境保全を軸としながらも、地域に根差したものの、広報活動にも力を入れていきたい。

干潟という

生きたつ絵模様 織り続け

後世に贈りて 与うべし

すでにご承知のとおり、このたび谷津干潟の保存が決定されました。これに至るまでには、実に多くの人たちの協力があつたればこそ成し得たことであり、特に報道関係者の方々には、「お知らせ」等において少なからぬ紹介をしていただき、大変お世話になりました。

干潟の環境美化のために、ゴミを拾って拾って、拾い続けてきたこの十年間……。ひと口にゴミ拾いと言っても、①ゴミを拾う作業、②收拾・搬出、③不法投棄の防止、と三つに大別されます。

これらは今でこそ、いずれもほぼ満足に近い状態になっていますが、なかで

も②と③の行政や住民対策には、長年にわたってさまざまな苦勞の連続でした。甦る数々の想い出とともに、めぐり遇った多くの人たちの協力や好意、参与と励ましに、深く感謝と御礼を申し上げます。

谷津干潟美化運動において、現在ある功績の大半は、寒暑にかかわらずただ黙々と、不肖森田を信じてゴミ拾いに励んできた地元主婦の勞作以外、何ものでもありません。

彼女らは、自然保護や運動、主義・主張や政治云々を言葉にすら出さず、関心もなく、「干潟をきれいにしたい」という、たった一つの心ばかりに、共に幾多の困難を乗り越えてきたものです。

谷津干潟クリーン作戦は、常に谷津干潟保護運動のバックボーンになってきました。そしてまた、地元主婦の力は、クリーン作戦のなかの“からし種”となってきました。

彼女らに今、森田は何を以て報うべきか、思案に迷うばかりです。



## 春の息吹

この頃ともなれば、時々暖かい日もある。そんな時、「春は近いな」と思う。その一つ。干潟の表面に小さな穴が見えてくる。直径が一ミリから二ミリぐらゐ。あちこちいたるところに。特に泥のところに出てくる。

ゴカイの穴である。暖かくなるにつれてその数は増えてくる。潟スキーで滑っていると、よくわかる。そして、ちよつと言葉では言い表しづらいが、いわゆる「泥が生きているな」と思わせる色を帯びてくるのである。つまり、泥の表面が、真冬のようにのっぺらぼうの色ではなく、微妙な色の違いがある。

二つ目はカニによるもの。小さな山のようなデコボコが干潟全体に出てくる。カニの場合は、泥のところだけではなく、砂のところにも起きる。詳しくは知らないが、おそらくカニの生命活動が活発になり始め、モゾモゾ動くせいでは

ないだろうか。

遠くから見て、砂や泥のところにもデコボコが出てくるのは、砂のところでは砂質のカニが、泥のところでは泥質のカニがそれぞれ動いたためだろう。

潟スキーによるクリーン作戦では、それらを目の当たりに見、肌で接することになる。特にカニによるデコボコは、潟スキーのサーフボードの動きにも影響を与える。まっすぐ、平らに滑らなくなるのだ。カニのつくった“山”が存在するため、サーフボードが上下左右に揺れ動くのである。時にはボードが下の動きで「パタン」とか、水のあるところでは「バシヤツ」と水音を立てるほどである。裾野の直径が四十〜五十センチぐらいともなれば、私は上体を左右させながらかわしていく。滑り具合がまるつきり違う。山に乗り上げると、どうしても滑る力が殺されてしまう。

私は、サーフボードで干潟のあちこちをゴミを拾いながらさまよい、ゴカイやカニの動きを想像し、春が近づくと楽しみを与えられている。

## 体で干潟を知る

この十四日、習志野市立谷津小学校四年生の子供たちが社会科の授業で谷津干潟のクリーン作戦をした。ほとんどの子供たちは干潟に入るのは初めてである。

先生によれば、谷津干潟のことを授業でやっているが、単に話に聞いたり、調べたりするだけでなく、体で干潟を知ってもらいたいとのこと。

見ていると、子供たちはいわゆる泥遊びが大好きなようだ。ゴミを拾うというよりも、干潟の泥とたわむれているといった感じで、ただもう「キャアキャア、ピイピイ——」。大勢で一緒にやっているせいか、不思議と「こわい！」とか「気持ちが悪い」と言う子はいなかった。

それにしても、子供の神経と体はやわらかいものと、その一連の動きを見ていてつくづく思った。始めは恐る恐る、そしてヨタヨタしながら泥の中を歩い

ている。しかし、ものの三十分もたつと、もうかなりうまく自然に歩けるようになっていく。

私は子供たちを一人ずつ漕ぎスキーに寄せ、一緒にゴミを拾った。つまり、前に子供を寄せ、私は漕ぎ役目。子供はゴミを捜し、拾う役目。一時間半に約十人ぐらいの子供を寄せた。

授業ですでに知っているせいか、初期の頃の谷津小の子供たちより積極的に漕ぎスキーに乗ってくる。

子供たちがこうして体で干潟に触れ、知ることはとても大切なことと思う。もっと時間がほしかったし、できればもう少し暖かい季節がいいであろうと思つた。

子供たちが帰った後の干潟は、文字どおり足跡の凸凹が隙間なくピツシリ、そして一面に――。実によく耕したものだ。

## 干潟の浅瀬は小魚がいっぱい

特に干潮時、それがはっきりとわかる。淺、あるいは潮溜まりにひしめいて  
いる。しかし、体長がせいぜい二〜三センチなので、よく見ないとわからない。  
よく目をこらせば、ごく小さなさざ波が立っている。

群で泳ぐので水が黒ずんで見える。おそらくハゼの稚魚であろう。四月頃で  
あればイワシの稚魚の群も同じようなくあいで見られる。ハゼのほかは、カレ  
イの子供や十〜十五センチのイナの群も入って来る。

浅瀬ゆえに酸素が豊富であるから、いろいろな稚魚が育っていくには干潟が  
絶対必要であることはよく知られている。それをまざまざと見せてくれるのが  
春から今のこの時期である。

ここのサギは魚を喰い放題である。いとも簡単についばめる。干潮時は水深

がなく、潮が入ってくるときは魚も入ってくるので、水際に立っているだけで目の前を魚が泳いでゆく。

去年、澤の浅瀬で遊んでいた子供がハゼの稚魚を捕ってきた。バケツの中に入っているのを見て驚いた。気持ちの悪いくらいぎっしりと詰まっているのだ。掌ですくうと、「山盛り」になる。別にこれといった目的はなく、ただ手ですくって捕るのが面白かったとのこと。

実際、干潮時の澤では、子供でも楽に手ですくえるのである。すくえるだけでなく、もう一〜二ヵ月もすると、水の中で脚にぶつかってきたり、足の裏の土踏まずに潜り込んでくる。

あるTVの撮影のとき、流れに向けて四つ手網を張った。水の中で立ったりしゃがんだりしている子供の体に次々とぶつかるとハゼとボラを手づかみで捕まえていたとき、「ワァーッ！」と叫び声を挙げて子供が岸に出た。そしたら、その子のパンツの脇から十五センチくらいのボラがとび出してきた――。

## 「おまえ 谷津干瀉をやれ」

堀井英幸君が学校の先生から、夏休みの自由研究のテーマとして、そう言われたとのこと。

彼は中学一年生で、部活動は野球をやっている。時々、日焼けして、土に汚れたユニフォーム姿の彼を見かける。部活を終えて帰宅すると、とにかく空きっ腹なので、まず「何か喰うものない？」ときくそうだ。

夕食は二回取るという。空腹のあまりのとりあえずが一回、そして風呂に入ってから、さらにちゃんとした食事を一回というぐあいに。

その彼が今、谷津干瀉で調査活動をしていて、仲間がもう一人いる。二人とも、干瀉のそばにある谷津南小学校時代にはよく干瀉に遊びに来ていた。特に堀井君はよくやって来て、私たちの仲間は殆ど彼を知っている。

今まで谷津干潟にはたくさんの子供たちが来た。そのなかでも堀井君は、おそらく谷津干潟と最も多く接し、体験している子供だ。また、子供なりに谷津干潟をよく知っていると思う。

たとえば、アサリやオオノガイのいるところ、ハゼがいるところやその捕まえ方、カニがどんなところにいるか、実によく知っていた。

知的好奇心も強くて、ニホンスナモグリやドンコ、私も知らないカニを捕まえてきては、後で調べて名前を教えてくださいと言った。

この炎天下、仲間と二人で干潟の中に入って何かをしているのを見る。パンツ姿で水の中に入っていたり、潟スキーで滑っている。私から見ると、半分楽しんで遊んでいるんじゃないかと思える。

夏休みの数日前、「今度、夏休みの自由研究で谷津干潟をやります。だから、潟スキーと四つ手網を貸してください」と言ってきた。本来は自由テーマだが、担任の先生から「おまえは谷津干潟をやれ」と言われたって。さて、どんなものができるやら……。

(一九九一・七 第三〇八回)



## 谷津船溜まりクリーン作戦

谷津船溜まりのクリーン作戦をすることになった。„船溜まり然”とした、水辺のある公園として保存したい。そう思って、十二月二十九日にまず下調べをして、年明けて一月十九日、第一回目の「谷津船溜まりクリーン作戦」を展開する。

いまは確かにゴミだらけだ。しかし、あの谷津干潟で繰り広げてきたゴミ拾いを思えば、その面積僅か一ヘクタール強。クリーン作戦においては百戦錬磨のわれわれ、大したことはない。

一月十九日には久々に「幸福の黄色いハンカチの旗」を翻し、クリーン作戦のノボリを立てて、市民や、特に近所の住民にも呼びかけて行いたい。

この船溜まり、かつての谷津干潟がそうであったように、地元から「臭くて

「汚いから埋めてくれ」という声が挙がっている。しかし、船溜まり自身に罪はない。

われわれからすれば、「自分たちで汚く、臭くしておいて、いまさら埋めるとは何事だ！」ということになる。だったら、きれいにすればいいじゃないか。それなら文句もあまり出まい。

全国的にも珍しい船溜まり公園。知る限りにおいては横浜の金沢区にある。すでに視察してきた。そこは団地の中で、ショッピングセンターや銀行・喫茶店などがある目の前僅か五十メートルのところ。水も砂もきれいだった。海からハゼなどが入ってくるという。現に飛び跳ねている魚の姿が見えた。

これからしばらくは、この谷津船溜まりをクリーン作戦の拠点にしていく。保存に向けて、一人でも多くの協力、参加を求めていきたい。

## 母校から援軍

母校とは船橋市立宮本中学校。九月二十九日、一年生全員約三百人がクリン作戦に来るといふ。『どろんこサブウ』（講談社刊）を読んで、「先輩に続け」ということだそうな——。

宮本中学校の一年生はいま、谷津干潟をテーマにした授業をしているとか。先日、担任の小林先生をはじめ六人の先生がゴミを拾う場所等の確認に来たので、私も説明がてら現地案内をした。小林先生とは、七年ほど前、二宮中学校の立志式で講演を頼まれたのがきっかけである。

後日、宮中へ資料のビデオを届けたとき、玄関にかつて私の担任であった先生の水彩画がかけてあった。それを見て、卒業文集に書いた詩のことを思い出した。いまから三十三年前、昭和三十五年のことである。

「海と空と白い雲の思い出」

かげろうが立ち

すべてが暗緑色になっている夏の今日

窓ガラスをふきながら 光っている海を見た

白い雲がむくむくとわいてくる

ああ あの頃もこんなだったっけ

幼い頃の自分が思い出される

素足で片手に棒を持ち

半裸で海の浅瀬で走ったり泳いだり

貝をとったりしたっけ

あの

白い雲がおおいかぶさるような

青い青い海で

宮中は高台にあつて、当時は海がよく見えた。私の教室はいちばん海側にあつて、高い窓のところに座つては、ガラスに息をふきかけながら海を見ていた。森林や麦畑の向こうの、その光る海こそ、この谷津干潟であつた。

後日、そこが闘いの場となり、やがて母校の講堂で後輩に講演し、その後輩がゴミ拾いの応援に来るとは、いったい誰が想像したろう……。

（一九九三・九 第三九一回）



昔の干潟

## あとがき

鋤を手にしより

後を振り返るもの

そは、神のみ心にふさわしからず

— 聖書 —

へドロとゴミと悪臭。干潟が息をできない、いや、息をしたくったって、苦しんでいるみたいだった。そこを、たとえ三十センチ四方でもゴミをどかして、息ができるように、楽にしてやりたかった。それで、だからどかした。

二、三日したら、鳥の足跡がいっぱいあった。エサを採りに来たのだ。何回もやっていたら、私が帰ったあと、すぐ鳥が来ていた。

一週間ぐらいしたら、ピンクや緑色のへドロの色と匂いが消えた。やがて、ゴカイやカニの巣穴ができた。春になると、かわいらしい、ちっちゃな緑のヨシの芽が出てきた。泥や砂、ヨシやゴカイやカニが、「アリガト、アリガト……」と言ってるような気がした。

やれば少しずつきれいになる。だから、やる。そのことの前に、何の理念も方針もいらない。その絶え間ない繰り返し。それが、ゴミ拾い、谷津干潟クリーン作戦である。

風にゆれるヨシ、群舞する渡り鳥、体操ガニ、帯のように泳ぐ魚の群、夕陽に赤く染まる水面——。これらはみんな、谷津干潟の、生きたる。絵ことばにして、絵模様であり、私たちへの「生のメッセージ」でもある。

私は思う。ふるさとの「ふかんど」が、谷津干潟が、私に最も求めたものは、環境や運動の、理屈や知識、言葉や、どこそこの会員ということではなく、迷い、つまづきまろびつしながらも、それでもいいからやれという、私という「人間それ自身」だったと。



そんな私を支えてくれた、なかでも橋本敏夫氏、小林大光氏、松枝多加子氏、高木世津氏、宮川郁子氏、「いそしぎ」の松永孝・弘子夫妻、長塚進吉氏、五十嵐吉夫氏、山口昭三氏、中村容子氏など、実にたくさんの方々がいる。

単に名前の羅列ではない。めぐり会った人たちを思うと、その時その場のことがありありと甦ってくるのである。

各地で「クリーン作戦」の名前が定着し、三番瀬、藤前など、干潟の重要性がやっと市民の間で話題にされるようになってきた昨今、谷津干潟はその呼び水になったかなあと思うこの頃である。

最後に、長年にわたり「クリーン作戦のおしらせ」を作成、発送し、このたび、膨大な資料をとりまとめ、編集して、この形あるものにしてくれた中村容子氏に心よりお礼申し上げます。

一九九九年一月

森田三郎

# 谷津干潟クリーン作戦のあゆみ

谷津干潟愛護研究会編

年	昭和49年(1974)	(1975)
て き こ と	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 「消滅間近 旅鳥の宝庫」の新聞記事の写真の中に、ふかんと時代の杭を見る。</li> <li>○ 干潟近くの住民から、「臭くて汚いから埋め立てよ」の声が次々と市へ寄せられた。</li> <li>○ 市の広報が都市計画を発表、その図面では干潟は全部消えていた。</li> <li>○ 東京湾岸道路が干潟の真ん中を通る予定</li> <li>○ 国も県も、「干潟を残す計画は全くない」と発表</li> <li>○ 東京湾岸道路建設に反対する谷津・若松・袖ヶ浦・幕張の住民運動が、干潟の保存運動に協力 共に雪の中をデモ行進</li> <li>○ ゴミ拾いを開始</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ ゴミの回収を交渉したが、国・県・市すべて拒否</li> <li>○ 習志野市の「谷津干潟プロジェクトチーム」が、「谷津干潟はますます汚染が進み、数年にして滅亡する」と発表</li> </ul>

78)	昭和52年(1977)	昭和51年(1976)	昭和50年
<p>○ 千葉県企業庁 看板を撤去。取り返して、再び立てる。</p>	<p>○ 元旦に、成果の有無にかからわず「谷津干潟保存運動一〇年間実行」の決意</p> <p>○ 干潟の護岸に松の木一〇〇本植樹</p> <p>○ 一カ所の計画だった水路(トンネル)を四カ所にするよう建設省と交渉。東西二本の水路を含め五本の水路となり、干潟内の水の循環がよくなる。</p> <p>○ 環境庁 谷津干潟保存の希望を表明</p> <p>○ 交通事故で左足骨折入院 退院後、松葉杖とギプスのまま、ゴミ拾いと看板三〇本立てる。大きな流水や看板は、体にロープを巻きつけ、杖について引っ張る。</p>	<p>○ この頃行政は、「谷津干潟」と呼ばず「大蔵省水面」と言っていた。</p> <p>○ 習志野市議会 谷津干潟保存を否決 埋め立てを強調</p> <p>○ 千葉県企業庁と交渉の上、干潟西側水路出口のヒューム管を撤去。開渠にする。</p> <p>○ 谷津干潟の周囲全域に一三二本の看板を立てる。</p> <p>○ 会長一人の「谷津干潟愛護研究会」創立</p>	<p>○ 東京湾岸道路が計画変更され、海側へそれることになる。</p> <p>○ 東京・葛西から、浦安・市川・京葉港・幕張埋め立て地(約二五〇〇ヘクタール)でコアシサシ・シロチドリ・コチドリの繁殖調査(以後毎年)</p>

昭和55年(1980)	昭和54年(1979)	昭和53年(1978)
<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 千葉県 谷津干潟保存の希望を表明</li> <li>○ ゴミ拾いを「谷津干潟クリーン作戦」と名付け、3月23日 第一回。以後毎月第三日・火曜日に実施・クリーン作戦に土のう袋を使用</li> <li>○ 千葉県企業庁 東水路の両側に緑地をつくる。</li> <li>○ 東京湾道路建設の日本道路公団・前田建設・竹中土木、クリーン作戦に協力</li> <li>○ 大蔵省 クリーン作戦に協力</li> <li>○ クリーン作戦モデル地区(谷津三丁目)にアシヤ水草が茂り始める。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 地元から主婦の協力者出る。</li> <li>○ 俳優森繁久弥さん干潟にバードウォッチングに来てテーブルとベンチで食事。カンパをもらう。</li> <li>○ 自然保護団体・千葉県・県企業庁の三者会談。約三ヘクタールの緑地確保決定。</li> <li>○ 千葉県企業庁、谷津干潟の環境保全と鳥獣保護区推進の協力を約束</li> <li>○ 干潟のヘドロ状のところへ砂を入れ、チゴガニ、コメツキガニの棲息を促す。</li> <li>○ 俳優森繁久弥さん干潟にバードウォッチングに来てテーブルとベンチで食事。カンパをもらう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 流木とアシであずまやを八つ建設</li> <li>○ 埋め立て地に毎日野宿し、セイタカシギの繁殖監視</li> <li>○ 京葉ホンダ小林大光社長より車をもらう。</li> </ul>

昭和57年(1982)	昭和56年(1981)
<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 習志野市の態度軟化し始める</li> <li>○ 日本野鳥の会各支部と合同大クリーン作戦</li> <li>○ 谷津遊園閉園</li> <li>○ メダカの池の造成に着手</li> <li>○ 千葉県企業庁に連日ゴミを届ける。</li> <li>○ 「谷津干潟友の会」設立</li> <li>○ 谷津遊園の干潟に突き出た壊れた栈橋を撤去させる。</li> <li>○ 京成電鉄 私有地の干潟部分約四ヘクタールの埋め立て</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 谷津干潟愛護研究会会報「ふかんど」第一号発行</li> <li>○ 新聞販売店を退職し、住所を市川市から習志野市へ。谷津干潟の至近に住む。</li> <li>○ 谷津干潟クリーン作戦モデル地区完成 護岸上に約二、〇〇〇袋のゴミ入り土のう袋を積み、住民のゴミ投棄に抗議のデモストレーションを実施</li> <li>○ 「潮の時刻表」を立てる。</li> <li>○ 干潟の周囲と水路を毎日バトロール開始</li> <li>○ 主婦のための「谷津干潟環境美化委員会」設立 毎月第四火曜日に干潟の清掃</li> <li>○ 谷津干潟水上観察舎設置</li> <li>○ 谷津干潟野鳥観察舎建設 県企業庁の許可を得られず、後に自主撤去</li> </ul>

昭和58年(1983)	
○	干潟のアシ原の養生に着手
○	干潟周辺の草むらで、夜間のゴミ不法投棄の監視パトロール
○	干潟のアシ原でコミミスクの餌づけに成功 掌からネズミを取っていく。
○	国土地理院発行地図に「谷津干潟バード・サンクチュアリ」の標記
○	谷津干潟市民クリーン作戦開始(毎月第一日曜日)
○	谷津三丁目町会よりクリーン作戦協力の申し出とカンパ
○	干潟にコアモモ発生
○	メダカの池完成 周囲に草を植える。
○	・メダカの池にアマガエル棲息
○	・ガマを植える。
○	東関東自動車道開通
○	朝日新聞夕刊「新人国記」に掲載される。
○	「谷津干潟友の会」ののぼり製作
○	公害防止事業団 谷津干潟のバード・サンクチュアリ化と緑地公園計画を発表
○	千葉県企業庁 ゴミを毎月二回定期的に回収
○	大蔵省 東京湾岸道路緩衝緑地工事に谷津干潟周辺整備を含め予算を計上

昭和61年(1986)	昭和60年(1985)	昭和59年(1984)
<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 釣り糸・釣り針回収作戦</li> <li>○ 谷津南小学校校歌に谷津干潟登場</li> <li>○ 住宅都市整備公団千葉工事事務所 クリーン作戦に協力</li> <li>○ 干潟のアシ原でヨシゴイの営巣を確認</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 千潟にノリが発生</li> <li>○ 千潟でカブトガニ発見</li> <li>○ NHK教育テレビ 5年生の社会科「東京湾を考える」に出演</li> <li>○ 千潟でカブトガニ発見</li> <li>○ ふかんど島で初めてクリーン作戦を展開</li> <li>○ クリーン作戦に潟スキー登場 市民よりサーフボードの寄付</li> <li>○ 五メートルに。</li> <li>○ 住宅都市整備公団谷津パークタウン建設開始 千潟沿いの緑地幅一〇メートル案を一</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ タクシー運転手となる。</li> <li>○ 『谷津干潟クリーン作戦』一〇〇回を数える。</li> <li>○ 森田三郎をモデルにして、PHPNフィクション『とりもどせ ぼくたちの海』、</li> <li>○ 講談社『ハンカチ形の海のおもいで』出版される。</li> <li>○ 習志野市 埋立計画を撤回し、鳥獣保護区谷津干潟を含む都市公園の管理者となることを決定</li> </ul>

昭和63年(1988)	昭和62年(1987)	
<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 「谷津干潟クリーン作戦」二〇〇回を数える。</li> <li>○ 習志野市議会 谷津干潟整備計画を採択</li> <li>○ 環境庁視察に来る。</li> <li>○ 国有財産審議会が、大蔵省から環境庁への干潟の移管を「適当」と答申</li> <li>○ 11月1日 国設鳥獣保護区特別区に指定</li> <li>○ あずまや「いそしぎ」 花火で焼失</li> <li>○ NHKラジオ海外放送「ある日本人」に出演</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 朝日新聞「天声人語」に掲載</li> <li>○ 谷津干潟の機関紙として『ふかんど通信』発行</li> <li>○ 船橋市立二宮中学校立志式で講演</li> <li>○ 本田カヨ子著「甦れ 谷津干潟」 読売・カネボウ・レディス・ヒューマン・ドキュメンタリーに入賞</li> <li>○ 森田三郎 習志野市議会議員に立候補 最高得票で当選</li> <li>○ 「二代目干潟の車(走行二万五〇〇キロ)」走行不能となり、三代目誕生</li> <li>○ 「ゴミーひろい愛」のマークを印刷したTシャツとトレーナーを作製</li> <li>○ TV朝日「ニュースステーション」でクリーン作戦放映</li> </ul>	



平成2年(1990)	平成元年(1989)
<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 読売新聞夕刊「Who's Who (野性生物)」欄に掲載</li> <li>○ ウ・モリタ」の名称が付く。</li> <li>○ 株式会社グランパ主催「サンタ・オブ・ザ・イヤー」受賞、実在する星に「サブロ</li> <li>○ 大阪府吹田市「ゴミを考える全国集会」で記念講演</li> <li>○ 千葉県立船橋高校定時制で創立七十周年記念講演</li> <li>○ 「週刊読売」のグラビアで紹介される。</li> <li>○ 松下竜一氏を招いて『どろんこサブウ』出版記念会開催</li> <li>○ 『週刊読売』のグラビアで紹介される。</li> <li>○ 松田三郎をモデルに、講談社より松下竜一著のノンフィクション児童書『どろんこサブウ』出版</li> <li>○ 習志野市議会にて、ラムサール条約に谷津干潟の登録を要望</li> <li>○ 環境庁・千葉県による「国設鳥獣保護区谷津干潟」の看板立つ。</li> <li>○ 谷津干潟整備計画について、国・県・自然保護団体が意見交換</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 谷津公園・谷津バラ園完成</li> <li>○ NHK教育テレビ「みんな地球人・干潟を野鳥の楽園に」に出演</li> <li>○ 第二十三回吉川英治文化賞受賞</li> <li>○ 第七回朝日森林文化賞自然保護部門最優秀賞受賞</li> <li>○ 谷津干潟愛護研究会会報「ふかんど」四〇〇号を発行</li> </ul>

平成5年(1993)	平成4年(1992)	平成3年(1991)
<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 環境庁 谷津干潟をラムサール条約登録指定地として登録申請</li> <li>○ TBSテレビ「ビッグモーニング」出演(夢追い人)</li> <li>○ 中学2年生の道徳教科書に『どろんこサブウ』掲載(抜粋)</li> <li>○ 東京・日本動物植物専門学校生約一八〇名とクリーン作戦</li> <li>○ 東京電力習志野営業所プチ・ギャラリーで「谷津干潟写真展」開催</li> <li>○ ラムサール条約締約国会議開催(於 釧路) オブザーバーとして出席</li> <li>○ 6月10日 ラムサール条約登録湿地となる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 新たに「谷津船溜まりクリーン作戦」を展開</li> <li>○ 習志野市長 市議会で「谷津船溜まりの保存を検討」と答弁</li> <li>○ 習志野市議会で再度、谷津干潟のラムサール条約登録を要望 市長は賛同の答弁</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 谷津干潟クリーン作戦三〇〇回を数える。</li> <li>○ 習志野市議会議員選挙で再びトップ当選</li> <li>○ テレビ東京「徳光和夫のテレビコロンブス」で徳光和夫氏より表彰される。</li> <li>○ 谷津干潟整備計画の第一期整備工事完成</li> <li>○ 浦安市立図書館で講演</li> </ul>

(1997)	平成 8 年(1996)	平成7年(1995)	平成6年(1994)
<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 習志野市が、6月10日を「谷津干潟の日」に制定</li> <li>○ 幕張メッセ隣りで、コアジサシ・シロチドリ・コチドリの繁殖調査を実施</li> <li>○ 父 森田吉男 死亡(享年八十八歳)</li> <li>○ 日本海での「ナホトカ号」原油流出事故対策に協力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 習志野市芝園でコアジサシ・シロチドリ・コチドリの繁殖調査を実施</li> <li>○ 千葉市立幕張西小学校の特別公開授業に取り上げられる。「干潟はみんなの宝物」の歌ができる。</li> <li>○ 月刊・正論「日本人探訪」に掲載される。</li> <li>○ 谷津干潟が「東アジア・オーストラリア地域・シギ・チドリ類保全湿地ネットワーク」に加盟</li> <li>○ 森田三郎をモデルにした『いきかえった谷津ひがた』(佼成出版)が出版される。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 習志野市の高校生と身障者による「ワークキャンプ」とクリーン作戦</li> <li>○ 谷津干潟の環境保全の為の国・県・市による三者協議開始</li> <li>○ 習志野市議会選挙で三期目もトップ当選</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 母・森田みち 死亡(享年七十八歳)</li> <li>○ 習志野市 茜浜のコアジサシのコロニーの保護を県に要請</li> <li>○ 谷津干潟公園完成</li> </ul>

平成10年(1998)	平成9年
<p>○ 谷津干潟がオーストラリア・プリズベン市のブーシタル湿地と湿地提携。調印式に市民として参加</p> <p>○ バラ園前の浜の入江に稚魚の群れが入り始める。</p> <p>○ 「干潟の想い出」の英語版が完成。ブーシタル湿地に寄贈</p> <p>○ 「中学・授業のネタ英語2」(日本書籍)に教材として掲載される。</p> <p>○ 森田三郎、個人タクシーを開業</p>	<p>○ 東京湾でのタンカー事故に対し、谷津干潟への原油流入防止策を市に要請</p> <p>○ バラ園前の浜にタヌキ出現</p> <p>○ NHK教育TV「週刊ボランティア」に出演</p> <p>○ TV朝日「ズームアップ」で放映</p>

## 森田三郎（もりた・さぶろう）

---

昭和20年（1945）千葉県船橋市宮本町生まれ。

昭和33年（1958）船橋市立宮本小学校、昭和36年（1961）同市立宮本中学校卒業。日立製作所習志野工場技能者養成所卒業。

昭和43年（1968）千葉県立船橋高等学校定時制卒業。

昭和46年（1971）東洋大学文学部英米文学科4年次中退。

この間、貸本屋、牛乳販売店、漬物会社、新聞販売店に勤務。また、小学校の頃より長年苦しんだ吃音を独力で直す。

昭和49年（1974）「埋められゆく谷津干潟」の新聞記事をきっかけに谷津干潟の保存運動に関わる。

昭和50年（1975）干潟のゴミ拾いを一人で始める。同年、谷津干潟愛護研究会設立。会報『ふかんど』を発行。

昭和55年（1980）ゴミ拾いを「谷津干潟クリーン作戦」と名付け、3月23日に第1回目実施。各報道関係者に「谷津干潟クリーン作戦のおしらせ」を送付。途中から、毎回簡単な文を添えるようになる。

昭和59年（1984）タクシーの運転手になる。

昭和62年（1987）谷津干潟の保存を訴えて習志野市議会議員選挙に出馬、市議会始まって以来の高得票でトップ当選。

ミニコミ誌『ふかんど通信』発行。

平成元年（1989）吉川英治文化賞受賞。同年、朝日新聞・朝日森林文化賞自然保護部門最優秀賞受賞。

平成2年（1990）俳優・津川雅彦氏経営のグランババ社より、  
サンタ・オブ・ザ・イヤール賞受賞。実在する星座に「スター・  
オブ・サブロウ・モリタ」の名称が付く。

同年、習志野市議会において、谷津干潟のラムサール条約登録  
を要望。

平成3年（1991）再び得票記録を更新し、市議会議員にトップ  
当選（2期目）。

平成4年（1992）習志野市議会で再度、谷津干潟のラムサール  
条約登録を要望。千葉県・習志野市ともに賛同を表明。

平成5年（1993）ラムサール条約締約国会議（於 釧路）にオ  
ブザーバーとして自費参加。6月10日、谷津干潟はラムサール  
条約登録湿地となる。

平成7年（1995）さらに得票記録を更新し、市議会議員に三た  
びトップ当選（3期目）。 平

成10年（1998）谷津干潟と、オーストラリア・ブリズベン市の  
ブーンダル湿地が湿地提携の調印。一市民として調印式に参加。  
同年4月、「森田三郎TAXI（個人）」開業。車体に50種類以上  
の干潟の生き物たちを描いたタクシーを走らせている。

谷津干潟クリーン作戦は、1999年1月現在 第580回を数え、  
なおも継続中。

現在、谷津干潟愛護研究会代表、森田三郎TAXI事業者、習志野  
市議会議員（3期目）。

「谷津干潟クリーン作戦」は、昭和五十（一九七五）年から続けていた干潟の「ゴミ拾い」を「谷津干潟クリーン作戦」と名付け、昭和五十五（一九八〇）年三月二十三日にその産声を挙げました。

当初は、主婦を対象に毎月第三火曜日に行われ、その後、加えて第一日曜日も「クリーン作戦」の日としました。

昭和五十八年七月からは、毎月第一日曜日を「谷津干潟市民クリーン作戦」と設定し、合わせて毎月三回の「クリーン作戦」が定期的に行われるようになりました。

昭和六十三年八月から、それまで五年間続けてきた「谷津干潟市民クリーン作戦」を「谷津干潟クリーン作戦」に一本化。毎月第一・第三日曜日及び第四火曜日を活動の日として、五八〇回を超える現在、なお進行中です。

その間、どんな小さな文字でもいい、どんな簡単なニュースでもいい、少しでも多く「谷津干潟」の社会的認知を得たいと、ことあるごとに「谷津干潟クリーン作戦」の予定を報道関係者にお知らせしてきました。

お蔭さまで、報道各社には、報道記事をはじめ、「おしらせ」、「短信」等々いろいろな形で取り上げていただき、今日ある谷津干潟の大きな支えとなったことは言うまでもありません。多大なご協力で深く感謝申し上げます。

この冊子は、そんな『谷津干潟クリーン作戦のご案内』に添えた文責・森田三郎の簡単な文章を、谷津干潟の保存が決まる一九八八年頃を中心にまとめたものです。

干潟をこよなく愛してやまない著者の想いをお伝えできるようにか。

## 谷津干潟クリーン作戦のお知らせ

谷津干潟愛護研究会

TEL. 047(451)5044 森田三郎

谷津干潟友の会

TEL. 047(451)7054 長塚進吉

谷津干潟環境美化委員会

TEL. 047(451)7076 中村容子

- 日時 毎月 第1日曜日 午後1時～4時  
第3日曜日  
第4火曜日 午前10時半～正午
- 場所 谷津3丁目 谷津バラ園先の干潟とその周辺
- 交通 ・京成「谷津」駅南口下車，商店街を直進して徒歩  
5分。公団 谷津パークタウン地先  
・J R津田沼駅より 京成バス「谷津干潟」行きにて  
谷津南小学校前下車，徒歩4分
- 用意する物 動きやすい服装 軍手またはゴム手袋 長靴  
または運動靴 [ゴミ袋もあればなお可]



# 干 潟 の 四 季

—「谷津干潟クリーン作戦のおしらせ」より—

---

1999年（平成 11）1月31日 第一刷発行

編 著 森 田 三 郎  
谷津干潟愛護研究会  
発行者 中 村 容 子  
発行所 ふかんど企画

〒 270-0026 千葉県習志野市谷津3-29-11-102  
Tel./Fax. 047 (451) 5044

印刷・製本 株式会社 新 報 社

---

無断転載・複写（コピー）を禁じます。

定価 800円（税別）